成寿

24巻

春季号
1995
横浜善光寺刊

SEIJU
1995年
第 24 巻
SEIJU

こころうらみなく

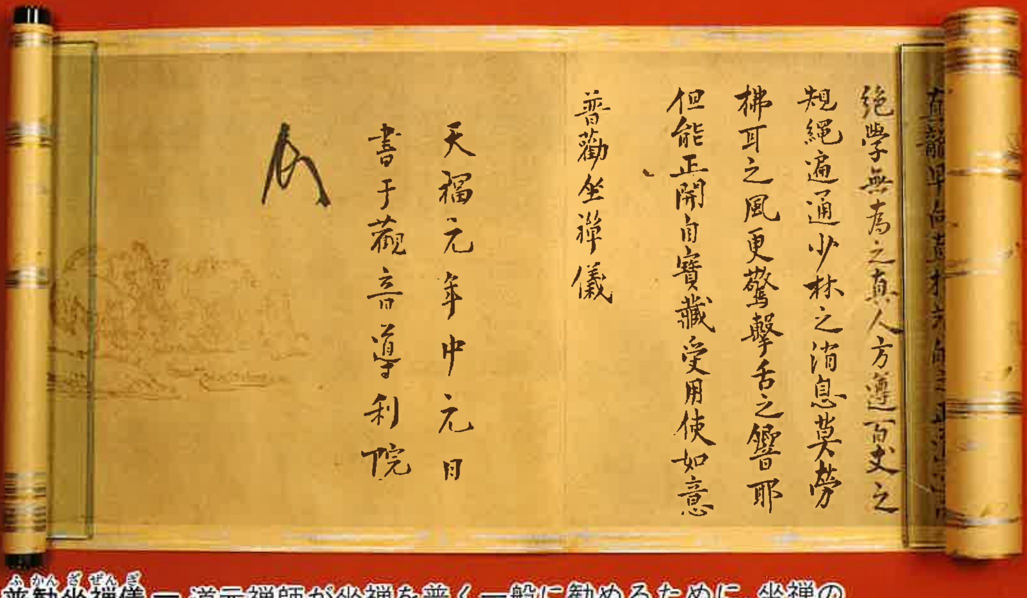
怨（うら）みをいだく人々の中に
たのしく
怨みなく
住まんかな
怨みごころの人々の中に
つゆの怨みなく
住まんかな

（法句経・一九七）

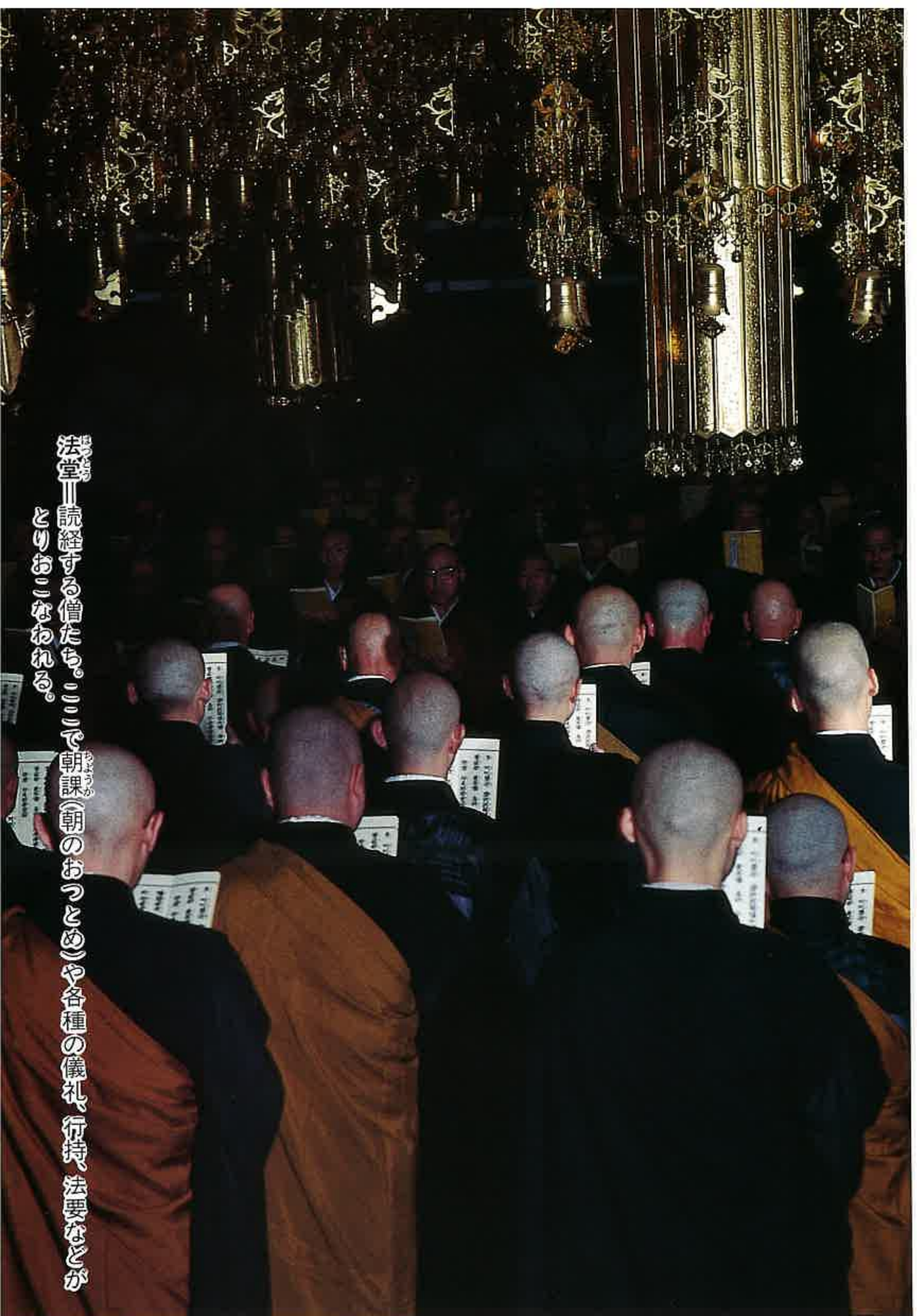
永平寺

山門＝修行を志願して、入門するために、威儀をととのえて、礼拝し、許可を乞う僧たち。

承陽殿＝永平寺の御開山の道元禅師をおまつりする。第二祖懐奘禅師の御霊骨も奉安されている。



普勧坐禅儀＝道元禅師が坐禅を普く一般に勧めるために、坐禅の意義、伝統、心得、方法、功徳、勧誘などを示した。国宝指定。



法堂（はっとう）＝読経する僧たち。ここで朝課（ちょうか）（朝のおつとめ）や各種の儀礼、行持、法要などがとりおこなわれる。

傘松閣（さんしようかく）—160畳の大広間。天井には昭和初期の有名画家144名による230枚の花鳥の絵が描かれている。

（写真提供永平寺傘松会）

新緑のなかの法堂＝山門のうえに仏殿（ご本尊は釈迦牟尼仏）があり、仏殿のうえ
に法堂がある。

鐘楼＝山門のそばにある。吊り下げられている大梵鐘はおよそ五トンの重量がある。朝に夕べに撞かれる。一拝して一回撞く。

カラー■永平寺

巻頭言●……………………………………………………………… 10

●なぜ留学僧育英会をつくったか……………………… 黒田武志 14

特集●大本山永平寺と道元禅師………………………………………… 22

●永平寺の折々………………………………………… 池田好雄 24

●腕時計を所持しない永平寺の雲水………………… 小倉玄照 33

特別寄稿●「急がば廻れ」の心意気を…………………… 古田紹欽 38

カラー■韓国へ答礼の旅……………………………………………… 41

特別読物●韓国　通度寺拝登…………………………… 東　隆眞 45

●祝　曹溪宗第九代宗正老天月下猊下………………………………… 61

●心に残る名句………………………………………… 佐藤俊明 64

カラー■大田山光真寺　成寿山善光寺　開山楳庵白純大和尚十七回忌法要　第十一回育英生辞令交付 73

●開山楳庵白純大和尚十七回忌法要厳修　留学僧育英会第十一回辞令交付式……… 81

●楳庵白純大和尚と光真寺…………………………………………… 86

●わが先師のガードマン白純大和尚………………… 大道晃仙 92

●僧宝的性格を顕示された祖翁…………………… グラスマン徹玄 94

●「世界に仏法光明を」——留学僧育英会の総会開く——………… 97

お便り●「権大教師補任」おめでとうございます……………………… 105

特別読物●砂漠と草原のモンゴル共和国の旅………… 伊藤　博 112

カラー■伊藤三喜庵の世界…………………………………………… 125

声　善光寺ニュース　読者のたより　留学生からのたより　ご寄付御礼……… 129

題字・さしえ　伊藤三喜庵

グラビア　永平寺　田村　仁

光真寺　五十嵐千彦

巻頭言

まず、はじめに阪神大震災の被災地の方々に心よりお見舞いを申し上げ、謹んで亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。この上は、くれぐれも健康にご留意され、一日も早く復興されます事を、心からお祈り申し上げます。

さて、当善光寺では今春御開山楳庵白純大和尚様の十七回忌に当りましたので、大本山永平寺監院南澤道人老師をお迎え致し、去る二月十日に法要を厳修いたしました。又、平成七年度第十一回の育英生の辞令の交付式をとり行いました。新たに五名の方々を採用いたしましたので、第一回から第十一回までに採用された育英生は六十一名になり、関係国も十六ケ国に一地域となりました。又論文集第二巻を秋までに出版の予定で、編集の作業を進めております。

これひとえに関係各位、又檀信徒の皆様方の暖い御支援の賜物で、厚く御礼を申し上げ、同時に今後共、育英会の事業推進にお力添えをお願い申し上げます。

御開山十七回忌法要後、南澤監院は「仏法は国籍も人種の違いも超えた、全世界に普遍的なものであり、その法縁により今日を生かさせていただいている。この喜びは何事にも換え難い。御縁をいただいたからには、我々自身がよりよい法縁をつくることが仏道を歩む者の務めと思う」と挨拶をされました。

中国の如浄禅師様（道元禅師様のお師匠様）の師匠様の雪竇（せっちょう）禅師は、「道の日に損（そこ）なわるるが為に」と次のように申されて、厳しくみずからの脚下を照顧して、

三分光陰二早過　　三分の光陰二は早く過ぎ
霊台一点不揩磨　　霊台（れいだい）一点揩磨（かいま）せず
貪生遂日区区走　　生を貪（むさぼ）り日を遂（お）い区区（くく）として走り
喚不回頭争奈何　　喚（よ）べども頭（こうべ）を回（かえ）さざるは争奈何（いかん）せん

人生の三分の二が過ぎてみて、振り返ると何一つほこるべきものがなく過ぎ去って行った。ただ生をむさぼり、人生をいいかげんに過ごして来た。これでいいのだろうかと反省して、精進努力の日々を送られたのであります。

仏教の教えの尊さに目ざめ、仏弟子としての自覚をし、仏法興隆、世界平和、そして人類の福祉に貢献すべく、皆様と共に歩んでいきたいと念じております。

日中交流の年

赤間義徳

世界十七ヵ国に
六十一名の人材が派遣され
昨年(平成六年)
横浜善光寺留学僧育英会は
十周年を迎えた。

〃かえりみれば
宗祖・道元禅師さまが
中国に渡り
正伝の仏法を
日本に伝持して下さらなかったら
善光寺も　留学僧派遣もなかった。
だから
横浜善光寺を起点に

世界八方へ伸びて行く
留学僧の道は
すべて
宗祖さまが
生命がけで　入宋渡海された
日中交流の道に　通じているのだ。

今年こそは
政治や経済よりずっと深いところを通る
日中の魂の交流の道を踏み固めていこう〟

大誓願を新たにして
黒田大圓方丈さまは
新春の風に吹かれながら
風の遠いふるさとから響いてくる
熱い励ましの言葉を　聴いていた。
「清明（せいめい）、躬（み）ニ在（あ）レバ、気志（きし）神（しん）ノ如（ごと）シ」

なぜ留学僧育英会をつくったか

善光寺住職　黒田武志（くろだたけし）

誓願

いまから十一年前といえば、わたしが住職を務めている横浜善光寺が、ちょうど開創十五周年を迎えた年です。ゼロから出発したわたしが、寺を持ち、発展させることができましたのも、みほとけのお導きと心温かい多くの方々の力添えのおかげ――これをひとつの節目としてなんとかみなさんにご恩返しができないものかと考えておりました。その具体化が、人を育てることだったのです。海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和にいささかなりとも貢献したいと。

一寺の住職がこのような大誓願を立てましたが、「そんなことできるわけがない」と思われた方も少なくなかったのではないかと思います。でもわたしはなにごとも信念を持って

行えば、かならず実現できると信じて生きてまいりました。このように思えるようになったのも、若き日の貴重な体験の数々があったからではないかと思います。

修行の始まり

そのときわたしは、逆方向の急行列車に乗っていたことに気づきました。まさかこの手違いが、甘えたわたしの心を叩きなおすために、ほとけさまが与えてくださった修行の第一歩となろうとは、思いもよらぬことでした。

37年秋、25歳の時日本一周托鉢に能登から出発

僧侶の兄が、開教師としてアメリカに渡ることになったのは、わたしが高校三年の夏のこと。世界中を歩いていろんなことを見てみたい。そんな夢を抱いていたわたしは、ぜひ連れていってくれと頼みました。それならまず仏教を学べ。それが兄の返事でした。それでわたしは、僧侶になる決心をして、大学で仏教を学んだのです。大学院もすませ、本山の總持寺に入りました。永平寺に入ったのも、アメリカへ行きたい一心のことでした。

せっかく寺に入っても、そういう我慢修行

ですから、ほんとうの修行ではありません。こんなことをしていて、いったい何になるんだろうと、まったくやりきれない気持ちで下積み修行をやっておりました。こんな未熟な心でいたからでしょう。永平寺では体を壊してしまいました。それで下山して福井駅から東京に帰るつもりで、列車に乗ったという次第なのです。

列車が逆方向と気づいても、いまさら引き返すこともできず（お金を持っていませんでした）、わたしは富山まで行きました。そこには学生時代の友人がおりました。彼の勧めで托鉢をしてみると、たちまちたくさんの喜捨が集まるではないですか。これなら手持ちがなくとも悠々と行脚ができる、よし、全国を回ってみようという気になり、わたしの托鉢行脚が始まったのです。いまから思えば当然のことながら、世の中よいことばかりでないことを、この長い行脚で思い知らされることになりました。

生かされていることに気づく

北陸、山陰、九州と回り、それから山陽を通って年も暮れ近く、わたしは京都に来ていました。雨が何日も続いていました。宿を求めて、お寺の門を叩いてまわりましたが、法衣はボロボロ、草鞋履きの足はドロドロ、馬糞のような臭いを立ちのぼらせているわたしに、よい返事は帰ってきません。駅で眠るには寒すぎる。

やっと一軒の木賃宿を見つけました。そのときの所持金が三百五十円です。宿代が素泊

まりで二百五十円。銭湯（宿の主人がお風呂に入るのを嫌がる様子なので、一キロ先まで歩いて行ったのです）が十六円。コッペパンなどを買って宿に戻りました。朝から何も食べていなかったのです。残ったお金を机の上に並べてみました。二十五円。ため息が出ました。明日の命もわからない、みすぼらしい僧侶。それがわたしの姿だったのです。

翌朝、雨の中、宿を出て行かねばなりません。おれはいったい何をしているんだろう。みじめさのどん底で、わたしは雨を眺めてぼんやりとしておりました。そのときです。こんな思いが突如として立ち現れたのです。おれは僧侶じゃないか。自分の生活を心配している場合じゃない。僧侶の役目はまずお経をあげることじゃないか！　簡単なことなんです。しかし、それまでは気づかなかった。

霧が晴れるような思いで、わたしは宿屋のご主人に頼み込み、お経をあげさせてもらいました。お経をかみしめながら唱えていると、ご主人のやさしさがありがたく身にしみてくるのでした。こんなわたしを追い払わずに泊めてくださったのですから。

感謝の思いでいっぱいのまま、ザンザン降りの町を、わたしは大きな声で「般若心経」を唱えて歩きました。門前払いの言葉も、わたしを磨いてくださる声に聞こえました。午後を過ぎて雨も上がりだしたころです。女子校の前を通りかかりましたら、ひとりの女学生から十円の喜捨……その十円の尊さ、ありがたさ！　気づくとわたしは土下座をして感謝を申し上げていたのです。すると次々とみなさんがご喜捨してくださいました。

こんなわたしなどに、なんてもったいないこと。感謝で胸が詰まりそうになったその瞬

タイ・ワットパクナムにて得度式

間、太陽の光がサーッとわたしの目に射し込んできました。ああ、わたしは生かされている！この身はほとけさまにおまかせしていればいいのだ！一人ひとりの中にほとけさまはいらっしゃる！……このときの感動をどう表現したらいいものか…。

それからです。状況は同じでも、心の中は豊かでやすらいだ思いで満たされるようになりました。怖いこともうれしいことも超越して、これでいいという心境になることができたのです。

どんな体験も修行である

全国行脚を終え、わたしは再び總持寺に入りました。自らの意志です。三年間の修行ののち、タイで一年学び、アメリカへ発ったのはそれからです。十八歳のときに夢見たアメリカでしたが、実現したのは三十を過ぎてか

らでした。しかしです。もしわたしが、簡単にアメリカ行きを許されていたら、人の尊さ、ありがたさに気づかぬまま、うわべだけの仏教論を説いていたことでしょう。

わたしが若い僧侶を見るとき、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてしまいます。どんなつらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。あのときの感動を多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ちが、わたしに「育英会」をつくらせたのです。

註　仏教コミックス通信『しん』(鈴木出版㈱発行／一九九四年十二月二十日)に掲載されたものです。本文は次のように紹介されました。

「――弘法大師空海は、わが国ではじめて庶民のための学校をつくった人である。仏教に限らず広い学問を学べる場を、授業料はおろか生活費まで保障するシステムだったという。空海が求めたのは、大衆の救済であった。教育の普及はその大きな柱といってよいだろう。

時代は下って現代。宗派を超え、個人で起こした育英会がある。今回はその人物にご登場願い、なぜ育英会を設立したのかを伺った。」

村岡有尚氏逝去

善光寺開基家二代目・村岡有尚(むらおかありなお)氏(株式会社ナリス化粧品代表取締役社長)が三月五日、大阪市北区の病院で死去されました。六十三歳。葬儀・告別式は四月六日大阪本願寺津村別院「北御堂」で執り行われました。(喪主は長男で株式会社ナリス化粧品副社長の弘義氏。)

ここに謹んでご報告申し上げますとともに、ご冥福を心からご祈念申し上げます。

平成七年四月十日

成寿山善光寺住職　黒田　武志

村岡有尚氏プロフィール

(善光寺留学僧育英会顧問)

昭和6年11月24日生　大阪府出身
32年3月　慶應義塾大学法学部卒業
35年8月　株式会社成寿堂(現・株式会社ナリス化粧品)入社
35年11月　常務取締役就任
49年6月　専務取締役就任
52年5月　代表取締役社長就任
平成元年1月　ナリス・コスメティック・トレーディング(タイ)CO.LTD取締役副社長就任

社長就任以来、先代社長(故・村岡光義氏)から引き継いだ『論語』を基本に経営を進め、近代的経営を目指すべく幾度となく社内改革を行い、ガラス張り経営の全社員経営参加意識を確立しました。

黒田住職が總持寺大本山で修行中の夏季摂心において、坐禅実修のため上山しておられたナリス化粧品の先代社長との出逢いによって、その後、さまざまな事業で援助していただき、善光寺開基家として当山を護っていただいています。これは仏の慈悲で心と心が結ばれたものであります。

大本山永平寺と道元禅師

　今をさかのぼること七五一年まえ、寛元二年（一二四四）七月、数え年四五歳の道元禅師は、越前志比庄（福井県吉田郡）に、大檀越・波多野義重公の支援をうけて、傘松峯大仏寺を創建されました。大仏寺の大仏は、開基義重公（如是居士）の号であるところから、これを寺号としたのです。この寺は、そもそもは尼将軍・北条政子と右大臣源実朝の菩提を弔うために建立されたといいます。二年後の寛元四年（一二四六）六月一五日、大仏寺を永平寺と改称し、更に二年後の宝治二年（一二四八）一一月一日、傘松峯を吉祥山と改名しました。これより、吉祥山永平寺とよばれて今日に至っております。

　吉祥山については、釈尊が坐禅成道（お悟りを開くこと）のとき敷いた吉祥草という草の名にちなんで、伽藍を建立するところは吉祥であるという由来があります。道元禅師は、吉祥とは、もろもろの仏たちの功徳のことであり、もろもろの仏たちとともに生活する場

所のことだと示しておられます。

永平寺の永平については、インドから中国にはじめて仏法が伝えられたのが永平一〇年(六七)であるという縁由があります。道元禅師は、永平寺と改称した日、この世に釈尊が降生して「天上天下唯我独尊」と宣言したのに和して、「天上天下当処永平」と唱えておられます。永平寺こそ、釈尊の仏法を正伝するわが国の仏教の原点であり、総府であると自負していたことを示すものでありましょう。永平とは、永遠の平和をあらわしている名称であると言ってもよいとおもいます。ここには、人類の崇高な理想が象徴され、生きとし生けるものの祈念がこめられているといえましょう。

吉祥山永平寺は、福井県福井市の東南一六キロメートルの山麓に位置し、境内はおよそ三三万平方メートル、七〇余棟の堂舎が整然と甍を並べています。つねに、二〇〇余名の雲水たちがきびしい修行生活をおくって余念がありません。

曹洞宗一五〇〇〇か寺の寺院と八〇〇万余人の檀信徒の大本山として、總持寺(神奈川県横浜市。瑩山禅師開創)とともに、寺院の根源、信仰の帰趨となっています。

(東　隆真)

特集・大本山永平寺

永平寺の折々

前・永平寺副監院　池田好雄

春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

これは「本来の面目」と題して詠まれた永平寺の開山道元禅師の作である。専門的な解釈をすると、さとりとか本来性とか、とてもむづかしいことになるが、この詩を、いやがうえにも一般的に有名にしたのは、恐らく、かつてノーベル文学賞を受賞された川端康成さんが、受賞記念講演をされたとき、その冒頭に引用されてからであろう。演題は「美しい日本の私」であった。そして二十六年後、同じノーベル賞が贈られた大江健三郎さんの演題は「あいまいな日本の私」であった。大江さんは、この演題を選んだとき「私は川端と声をあわせて『美しい日本の私』と言うことはできません」と言われた。

世界の文学を代表するこのお二人のテーマをどうこういうことは論外であるが、「春は花…」の詩は、まさに永平寺の四季、あるいは禅の本来性を詠んで余すところがないように思われる。そして大江さんは、この種の引用はなかったけれども、たとえば川端さんが禅をもって語ったことと、大江さんを同一線上に、並べてみると、あの、あいまいな、とおっしゃる日本民族がたどった破壊への狂信は、実は禅者の中にも、どれだけあるかわからない。

永平寺の禅とて、この埒外ではない。これを最も単純明快な言葉でいえば生死即涅槃であり煩悩即菩薩である。けれども、何が生死か、なにが煩悩かという見定めは禅者の力量による前に一つは、やはり永平寺の豊かな四季折々の表情から伺うことができる。

道元禅師は、春は花…と詠んだが、あの越後の良寛和尚は同じ筆法で、

形見とて　なにか残さん春は花
　山ほととぎす　秋はもみじ葉

と歌った。これは亡くなる直前の詩といわれているが、辞世のうたではない。道元禅師の詠みかたをかりれば、やはり大自然の風光をうたった「本来の面目」ではなかろうか。春夏秋冬が際立つ山の居ずまいであった。道元禅師も良寛さんも山住いであった。

現在永平寺の道場には百八十余名の修行僧がいる。早暁四時からの坐禅に始まって夜九時の坐禅で終る一日ではあるが、禅の日々は二十四時間フル回転するというのが行持をつとめる基本的な認識である。つまり一日の終りは翌日のはじまりで、空白のまっ白になっている時間は片時もないのだ。そういう行持の組みかたをしている。だから生活は流れる水のごとく、行く雲のごとく、つまり行雲流水の禅ぐらしというわけである。

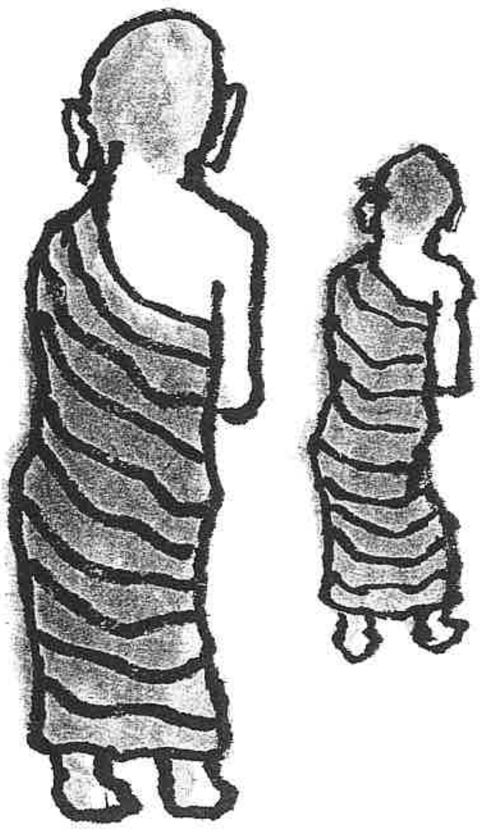
禅の厳しさというのは朝早くからたたき起されて坐禅し、禅堂で打たれ、先輩からどなられ、食事は玄米がゆで一汁一菜云々というのではなく、一日二十四時間の間断なき連続の中に没入していくことなのである。ここのところが修行暮しの眼目なのだ。そして、これを完全にやり遂げることを行持綿密という。

もう二年ほど前のことであるが、私は、こういう場面に出あったことがある。

永平寺は年に二回、それぞれ一週間づつ行なわれる法要、一つは四月の授戒会、一つは九月の御征忌である。九月二十九日までの七日間にわたる法要である。授戒会は全国から大勢の曹洞宗檀信徒が上山して一週間に及ぶ行事をつとめ、また御征忌には多くの宗門宗侶が集まって法要を營む。したがって本山内の役寮、雲水は多忙をきわめ、まさに行持綿密の一週間となる。

たしか御征忌が終った夕方ごろ、種々の後片付けが終って、上山していたご寺院は山を下り山内がほっと一息ついていた。私は役柄、行事法要が始まっても終っても、あたふたするのが公務であった。寮を出て七堂伽藍の廻廊を山門へ向ってあたふたと歩いていた時、作務衣姿の一人の修行僧が山門にたたずみ、五代杉が林立する境内のほうに向ってじっと佇立している姿が目に入った。私の足音をききつけた彼は振りかえったかと思うと、「すみません」と合掌し、そこから立ち去ろうとした。近づいて声をかけると彼は目にいっぱい涙をためていたのだ。

恐らく仕事が一段落し、少なくとも、この一週間は、いかに谿声の風光といえども、それに目をやるいとまなどなかった。その夕暮の風光を眺めていたにちがいない。ここまでなら、ごく当り前の、ああ終わったという安堵感で外の



景色に目を移すことは、いくらでもある。しかし彼は泣いていたのだ。私には、彼の涙の中味が、わかるような思いだった。まわりの風景が春であろうと秋であろうと涙には直接の関係はないのだが、この時の彼を涙にさそってくれたのは、まさに五代杉とか、永平寺を囲む幽谷のたたずまいであったはずである。「がんばれよ」、と私は彼の肩に手をおき、ひとこと声をかけた。

道元禅師は傘松道詠のなかに、

峰の色　谷のひびきもみなながら
我が釈迦牟尼の声と姿と

と詠んだ。これは口ずさんだ、その通りのことで山々の色、谿谷のひびきが、お釈迦様のお姿と映り、また説法の、み声として伝わってくるという。

しかし万人が万人、山や川の音を仏様のものとして見聞できるかといえば、そうはいかない。

夏目漱石の小説「虞美人草」に比叡山が出てくるが、会話に「高の知れた京都の山だ」とか、「恐ろしい頑固な山だなあ」とか、山登りをしている途中に「反吐が出そうだ」とかある。また「二百の谷々を埋め、三百の神輿を埋め、三千の悪僧を埋め、なお余りある葉裏に、三藐三菩提の仏たちを埋め尽して森々と半空に聳ゆるは伝教大師以来の杉である」というくだりもある。

峰の色…の描写とはかなりちがうが、それも一つの見方である。道元禅師はあくまでも山水と一如であった。山水が仏さまであった。その禅風が今日に伝わって、ここで修行する僧たちは古杉を見て涙し、山水の声を聞いて感動をおぼえるのだ。

その涙と感動の出どころはどこにあるのかといえば、右往左往しながらも、ともかく行持を綿密にするところへ一歩でも、半歩でも自分を近づけていこうとする日々の修行暮しが、そう

させるのである。
さとりとか本来の面目を自覚せよとか、日々の説法を受けても、試行錯誤することしきりである。そうこうするうちに頭がまっ白になって、手抜きをすることだって、どれだけあるかわからない。それを不如法というのだが、百名、二百名の僧たちが一人、一つづつ不如法したって百ないし、二百の不如法になってしまう。その時に幽谷や老杉や山々が動いてくれるのだ、声をかけてくれるのである。
青山常運歩という禅語がある。青山は常に動いているという、へんてこな言葉であるが、永平寺の山々は、ここに道場があり、かりにたった一人でも、二人でも如法なる修行僧がいる限り山は動く。そして山は説法をしてくれる。山内指導者の説法が理解できなくとも、山川の説法は聞こえてくるのである。
永平寺は四季の中で冬がまたいい。若者にとっては一つのロマンの世界である。そして雪は修行の友であり勝友である。最近は、ここ数年、いわゆる暖冬で、なんとも物足りない思いをする。雪国の子供や、それから犬は雪をみるとはしゃぎ出す。雪国の生れ、雪国の育ちでありながら人一倍寒がりである。けれども雪はいい。山形の雪もいいが、永平寺のほうがもっといい。
「深雪三尺大地漫漫」という語録のことばもあるが、積雪の多いときは三尺などというものではない、昭和三十年代に入ってから豪雪に見舞われ、永平寺が孤立してしまうという危険なこともあった。道元禅師の歌に、
冬草も見えぬ雪野の白さぎは
おのが姿に身をかくしけり
というのがある。山川草木が、すっかり雪に覆われた白銀世界のこの寺に一羽の白鷺が飛んできた。ところが雪の白さと鳥の羽の白さがひ

苏州
留园

とつになって、白鷺の姿が見えなくなってしまったという意味の詠みである。「舎利礼文」のお経にある入我我入の自他一如と同じ禅の境涯を示している。

我庵は越のしらやま冬ごもり
凍も雪も雲かかりけり

おやみなく雪はふりけり谷の戸に
春来にけりと鶯ぞなく

という歌もある。すべて御開山の詠んだもので、雪と永平寺、雪と道元禅師、そして雪と春、というように、そのほか数多くの雪のうたが残されており、それがまた禅の説法になっている。

永平寺の道場は、くりかえしになってしまうが、山中に開かれ四季鮮明な、春は花から始まって冬雪さえて寒し、の大自然裡に抱かれているから禅の面目が保持されているといっても過言ではない。

二十一世紀云々ということが少しづつ声高にきこえてくるが、二十一世紀は、それはそれでいい。今、永平寺は人力や文明科学の力をもってしては造りえなかったこの山と谷と水を修行のなかに、どのように仏様として頂戴するか、そして山の声、谷の声、川の声をどれだけ聴きとれるか、それが、あるいは二十一世紀へのテーマに引き継がれていくのではないか、そのように考え胸をふくらます思いをもって、この永平寺を見つめている。

柳は装う観音微妙の相
松は吹く説法度生の声

特集・大本山永平寺

腕時計を所持しない永平寺の雲水

――それは『速度の文化』を批判する――

成興寺住職　小倉玄照

十年一昔という古人の歳月観からすれば、私が永平寺を送行して一昔以上、むしろ二昔と言った方がよいほどの歳月が経過した。はるかな彼方に過ぎ去った永平寺の生活について記憶の糸を手繰りながら光陰は矢の如しの思いが募ってくる。

それにしても、永平寺で過ごした六年間は、毎日がまことにゆったりと進行していた。暁闇三時半（冬は四時半）の覚醒から始まる一日は、あわただしさとは無縁のものであった。それは、全山の大衆に要所要所で時を知らせる大梵鐘の音が、まことにゆるやかな波長で人々の心に浸み込んで行く様子に象徴されると言ってもよかろうか。夜九時、二時間になんなんとする夜坐が終わって　開枕（就寝）を知らせる大梵鐘の音が、ぬばたまの夜の静寂の底から湧き出ず

るように、低音に響いてくると、私は正直なところ、ああ、やっと今日も一日が終わったか、という感慨に催されるのが常であった。

一週間、日がな一日、坐禅に明け暮れる臘八大摂心会（十二月）や、涅槃会大摂心会（二月）ともなれば、時間の進行がピタリと止まってしまったのではないかという気にすらなる。三時（朝・昼・夕）の大梵鐘を聴きながら、一分そこそこしかないはずの一声一声の余韻と、それが途切れた後の静寂が悠久の長い時間のように思われたりしたものである。

それにひきかえ、永平寺を送行した後の歳月の経過の速さは何としたことか。あっという間に一週間が経ち、一年間が過ぎ去って行く。この調子では、私の人生の終焉の日も指呼の間に迫っているようで恐ろしくさえある。

永平寺に於ける悠久な時の流れと、娑婆の生活における烏兎匆匆と言うてものろましくおもわれるほどの性急な歳月の経過ぶりとの差は、これはいったいどうしたことか。どこにいったい原因があるのか。

そんなことを思っていたら、朝日新聞（平成六年十一月九日付、大阪版）の「世紀末通信」に清水克雄氏が、フランスの歴史家コルバンに対するインタビューをまとめていて、なるほどと膝を叩いた。

現代の社会を支配しているのは『速度の文化』だとするコルバンは、次のように言う。

「昔はどこの国でも時間は宗教家が管理するものでした。時間を知らせるのは鐘の音だったのです。時間は集団のもので、個人の時間というのも存在しないものでした。それがいままでは、時間は一つではなく、いくつもの時間が重層的に存在するようになっています。こうした時間感覚は、人間が過去に体験したことがないことなのです。」

そう言われてみれば、永平寺の雲水は、腕時計をつけていない。時間は、永平寺のものであって、個々の雲水のものではないということであろう。永平寺には、コルバンのいう『速度の文化』に支配され始めた近代以前の中世的なゆったりとした時間が化石のように存在しているのである。

それに対して娑婆の一日は、あっという間に過ぎ去って行く。早く移動しようという欲望にふりまわされているがゆえにそうなるらしい。そう言えば、ひょんな因縁によって三年ほど前私は自動車の運転免許を取った。過疎の山村で保育園の経営などをしていると、自動車がなければどうにもならなくなって来たせいもある。

ところが、一旦、自動車を運転し始めた途端、忙しさが倍増したように思える。時の流れに加速度がついてしまった感すらある。とにかくこのごろは目の回るほどの速さで一日が過ぎ去って行く。

道元禅師は、『正法眼蔵』有時(うじ)の巻で、時間の問題について綿密な思索を展開されているが、その中に次のような一節がある。

「われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭頭物物(ずずもつもつ)を時時(じじ)なりと覰見(ちょけん)すべし。物物の相(そう)礙(げ)せざるは、時時の相礙せざるがごとし。このゆゑに、同時発心あり、同心発時あり。および修行成道(じょうどう)もかくのごとし。われを排列して、われこれをみるなり。自己の時なる道理、それかくのごとし。」

現代語に私訳してみれば、およそ次のようになろうか。

「この現実世界はすべて自己とのかかわりの中で存在するものだから、それは自己がかたちをかえて排列されているようなものだ。この現実世界の人や物を一々にすべて時と見なしたらよい。物と物とはたがいにさまたげあわないの

は、時と時とが相さまたげないのと同じである。それゆえに、自己が発心すれば自己の周辺の人や物は同時に発心するし、周辺が発心すれば自己も同時にそうなる。道を求める心（発心）の問題ばかりではない。修行するという点についても、道をさとる（成道）という点についても同じである。自己を排列して、自己自身がそれをみるのだと考えればよい。自己が時そのものであるという道理は、まさにこのようなものである。」

これは要するに、時間のありようは、自己のありようによって左右されるものだということを語っている。自己の状況が、「十二時（一日）の長遠短促」（有時）の感覚に影響を与えると道元禅師は仰せになっているのである。

永平寺に身を投じた時、永平寺の時に自己は同一化する。それを道元禅師は「同時発心」と表現されたとみてよい。

娑婆に出て、腕時計をつけた途端に、時は自己そのものの支配下になる。自己が速度の欲望にふりまわされれば、当然に時はその速度に合わせて加速度をつけて早く経つ。それを「同心発時」というのかもしれない。

さて私は、せめて一週間だけでも腕に時計をつけないで過ごしてみたいと今思っているのだけれど、それはかなりむずかしいことのようだ。手帳に書き込まれたさまざまの行事予定や約束事がそれを許さないのである。

そういうわけで、永平寺の雲水が腕時計をつけることなく生活していることの意味の深さを私どもは自覚しなければならぬ。それは『速度の文化』に支配される現代社会を暗々裡に批判しているのだからである。

「急がば廻れ」の心意気を

財団法人松ケ岡文庫文庫長　古田紹欽

昔の諺に「急がば廻れ」といっている。急いで目的地に行くためには、出来るだけ近道をして行くに越したことはないが、近道ばかりを行こうとすると、却って目的地に着きかねることがある。一事が万事、廻り道をした方がいいというのではないが、損得の計算ばかり考え、近道は能率的だとばかり考えると、必ずしも計算通りにはならない。物事がすべて一律的に考えて、その通りになるとは限らない。人生というコースにしても同じであり廻り道をし、脇道にそれて無駄骨を折るということも得難い体験であり、その覚悟がないと、近道をしてもただ早く行き着いたというだけのことでしかなくなる。

廻り道をするということは苦労を餘分にすることであり、苦労は願ってでもすることが、究極にあっては身の助けに必らずなる。廻り道は脇道にそれたことにもなるが、脇道を経て初めて本当のことを知り得ることが少くない現代人は楽して得を取ろうとばえり考える。

ところが近道を余りに急いだばかりに、ころんで怪我をしたりする破目に時にはなりかねない。

非能力的なことを、わざわざ選んでする必要はないが、じっくりと腰を落ちつけて、ゆっくり見たり聞いたりすることが、人生の道を辿るには大事なことではなかろうか。

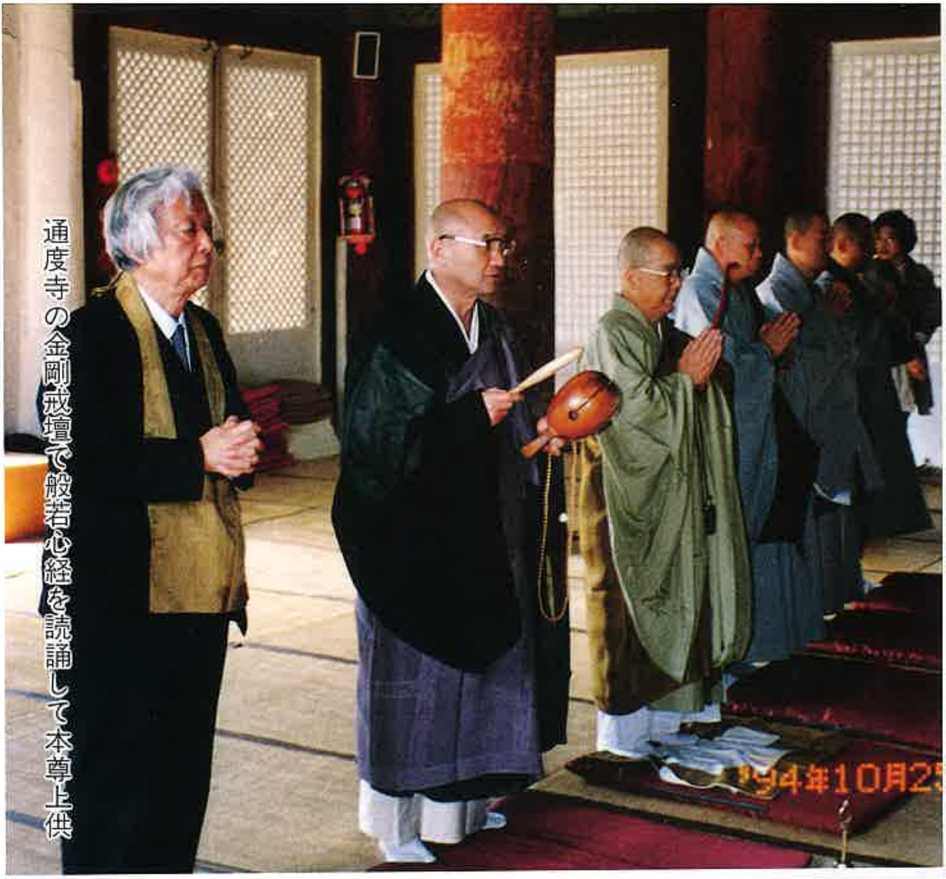
学問も順調に成果を収めるには如くはないが、不運のため脇道を辿ったり、餘儀なく廻り道をしなくてはならなかった人の業績を見ると、実に味深いものがあり、感銘を深くする。

人間は生きている限り、何によらずじっくりと腰を落ちつけて、急がず、といっても道草を食ってゆっくりとばかりしていては役立たずであるが、自分の人生の道を歩むことが大事なことではなかろうか。

世の中は世知辛くなって、能率主義が頻りに云われる。勿論非能率であってはならないが、何んでもかんでも早い方がいいというわけはない。

脇道を辿る限りは、人一倍努力をしないと近路を歩いた人には追いつけない。若い人は心身共に力がある。じっくりと、廻り道をして自分の力を確かめることが大事ではないかと、つくづく考える。他の人が百歩廻り道をしていることを知ったら、せめて百十歩くらいを廻り道をしてやろうという心意気がほしい。それがあったら廻り道は決して廻り道にはならない。廻り道として損をしたことにもならない。

韓国へ答礼の旅



通度寺の金剛戒壇で般若心経を読誦して本尊上供

特に許されて通度寺の金剛戒壇仏舎利塔を右遶一匝して礼拝する。
先導は定岳泰応住持。

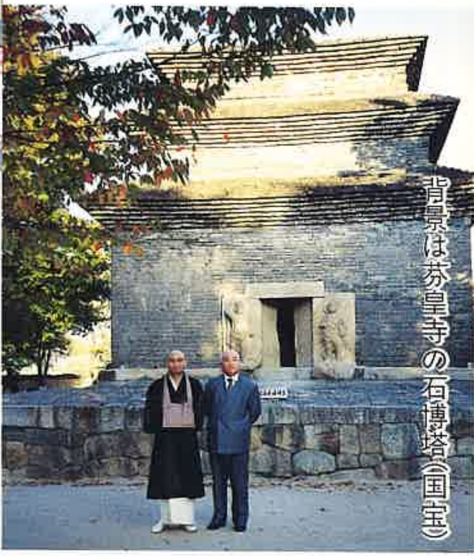
通度寺住職定岳泰応老師(左)と同博物館長釈梵河和尚。

右端は李焌秀師

不二門を入ると大雄殿がある。「源宗第一大伽藍」の源宗は仏舎利を意味するという。

通度寺の天王門を出て博物館へ向う一行

国立慶州博物館にて



背景は芬皇寺の石博塔(国宝)

石窟庵に詣でて

韓国 通度寺（トンドサ）拝登

駒沢女子大学学長代理・教授　文学博士　東　隆眞

私どもは、一九九四年（平成六年）十月二十四日から二十六日まで大韓民国に滞在し、二十五日、慶尚南道にある仏宝宗刹霊鷲山通度寺（トンドサ）に拝登した。

韓国の仏教は、二十六の宗団と、九千二百三十一の寺院と、二万五千二百五人の僧侶（比丘一万七千六百五十六人、比丘尼七千五百四十九人）を擁している。

このうち、代表的な仏教教団・大韓仏教曹渓宗についていえば、在籍僧侶の人数は、一万十七人（比丘五千二百三十一人、比丘尼四千七百八十六人）である。

主だった寺院の居住者を例示すると、曹渓寺（チョゲサ）二千九百七十七人（比丘千二百六十一人、比丘尼千七百十六人）がもっとも多く、ついで海印寺（ヘインサ）が九百七十二人、通度寺が六百八十六人、梵魚寺（ポモサ）が五百六十八人、修徳寺が三百四十二人（比丘七十人、比丘尼二百七十二人）の順になっている（曹渓宗総務院の統計公表。『中外日報』平成六年十一

月十五日付け)。

韓国の三大寺刹というと、仏宝、法宝、僧宝をあらわす曹渓宗の大寺院である。

仏舎利、仏袈裟を奉安して仏宝をあらわす通度寺(六四七年、慈蔵法師の開創)、八万大蔵経(高麗版大蔵経)を収蔵して法宝をあらわす伽耶山海印寺(慶尚南道。八〇二年、順応、利貞の二法師によって開創)修禅社を設けて僧宝をあらわす曹渓山松広寺(ソングァンサ。全羅南道。一二〇〇年、知訥法師の開創)が、それである。

曹渓宗の宗祖は、通度寺、海印寺では太古普愚法師(一三〇一—一三八二)とし、松広寺では知訥法師(一一五八—一二一〇)としているようである。また、曹渓宗から分離した太古宗では、太古普愚法師を宗祖と仰いでいる。

私どもの一行は、横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長(善光寺住職)、佐藤俊明常任理事(千葉県龍光寺住職)と同会理事の私(駒沢女子大学教授)である。

さらに、とくに日本仏教学界の代表として財団法人松ケ岡文庫長の古田紹欽博士(秘書役・渥美ゴルフ商会社長渥美和也氏)に加わっていただいた。

現地での案内役は、三日間を通じて通度寺の僧で早稲田大学大学院生である李燦秀和尚(もと育英生)と、通度寺聖宝博物館の釈梵河館長が献身的につとめて下さった。はじめに両師に対して、衷心より謝意を申し上げるものである。

今回の訪韓には、二つの目的があった。

まず、通度寺の老天月下方丈が平成六年三月に来日し、育英会の設立十周年記念式典にご臨席いただいたので、これに対する答礼。次に老天月下方丈が大韓仏教曹渓宗の第九代宗正(管長猊下)にご就任になられたとうかがったので、慶祝の意をあらわすためである。

老天月下方丈は、一九一五年、かつて百済の都であった扶余でお生まれになり、今年八十歳。十八歳のとき出家、得度し、一九五六年、通度寺の住持となり、一九五八年、四十三歳、金剛戒壇伝戒阿闍梨となり、さらに、曹渓宗中央宗会議長、東国大学理事長、総務院代行、宗正代行、曹渓宗元老、社会福祉法人通度寺慈悲院理事長などを歴任されている。韓国でもっとも徳の高い僧として尊崇されているお一人である。

二十四日夜、慶尚北道慶州市のホテル現代に旅装を解いた私どもは、翌二十五日午前十時すぎ、通度寺に拝登した。管長猊下は、一昨日、急遽入院されたとのことで、拝眉することはかなわなかった。しかし、定岳泰応住持や知庭教務院長ら通度寺一山の破格のご歓待を受けた。

佐藤常任理事、古田博士、私、黒田理事長の順で、老天月下方丈の管長猊下ご就任のお祝い（私の挨拶文は、別記のとおり）を申しあげた。

通度寺応接間にて

通度寺定岳泰応住持（左）と
聖宝博物館長釈梵河老師

通度寺開山堂に詣でて　古田紹欽博士と東先生

黒田理事長は、端渓大硯、通信機材などを贈り、通度寺より私どもに対して茶碗、花瓶などが記念品として授与された。古田博士は、通度寺開山慈蔵律師をおまつりする開山堂に参拝したいと、強い要望を述べられた。通度寺開山慈蔵律師といえば、通度寺の霊鷲仏教文化研究院では、一九九四年十月十三日に行われた第五回定例学術会議の記録冊子(B4判五三ページ)『慈蔵思想の文化史的考察』をいただいた。そこには、東国大学洪光杓教授の「慈蔵の造営観研究」をはじめ斯界の専門学者によって、慈蔵法師の華厳思想あるいは四分律や国家意識と政治的役割りなどに関する論文六篇が収められている。

一行は、大雄殿で威儀をただして般若心経を読経し回向して、とくに許されて金剛戒壇に向かった。定岳泰応住持のご案内で大雄殿のうしろの石造の金剛戒壇(中央に仏舎利塔がおまつりされている)に入り、住持のご先導で、読経しながら右へ一匝した。神秘的な感動をおぼえた。

このあと、諸堂を拝観し、聖宝博物館で釈梵河館長からくわしいご説明をうけながら諸宝物を拝観した。なかに、鎌倉、円覚寺釈宗演老師(一八五九―一九一九)の大幅が掲げてあった。それは、芦葉に乗った達磨大師の画讃で、「茫々宇宙無知己/万里長江一葉芦/応朝鮮白鶴鳴師需/日本瑞鹿山主演洪嶽并写」とあった。

三年後には、約八億円の予算で、二千坪の規模をもつ四階建ての鉄筋コンクリートの大博物館を建設するということで、目下、工事中であった。完成したら、必ずご案内すると館長は言われた。

前後するが、定岳泰応住持は、来年から開局する予定の仏教テレビ会社(英語名=ブッディスト・テレビジョン・ネットワーク)の社長に就任されることになっているらしい。そのパン

フレットをいただいた。ひるがえってみるに、日本には独立した仏教テレビ局はまだない。

一千数百年のむかし、朝鮮半島の仏教は、日本仏教のふるさとであり、ルーツであった。そしてまた、現代の韓国仏教は、現代の日本仏教を凌駕する点が多くある。

日本の仏教徒の多くは、もっとも近い韓国の仏教事情をほとんど何も知らない（もっとも、私もその一人で、お恥ずかしいことである）。日本の方が先進国であるといったような誤った先入観や固定観念を抱いているのではなかろうか。もし、そうだとすれば、それは、日本の仏教徒の慢心であり、誤解であり、不幸である。

このような不幸の原因の一つに知識の不足があげられよう。知識をもつには、おたがいの頻繁な交流が必要である。交流は、相互の理解を生む。理解は、友好と親善につながっていく。交流を盛んにするにはどうしたらよいか。日本の仏教徒は、この点に深い配慮をめぐらさなければならないであろう。（以上、「中外日報」平成六年十二月三日付け掲載。ただし一部補筆する）

前後するが、以下、思い起こすままに記録しておこう。

私どもは、二十四日午後六時すぎ、夕闇せまる釜山空港から金井山梵魚寺に直行した。梵魚寺は釜山の東萊地区、海抜八一〇米の金井山の中腹にある。六七八年、新羅の義湘大師が創建した古寺で、慶尚南道三大寺院の一つ。国宝を数多く収蔵するという。

梵魚寺という寺名はなにか曰くがありそうだ。調べてみると、むかし新羅の南方にある山のなかに岩があり、岩のなかに泉が湧いていた。その泉のなかで梵天の魚がたわむれていた。ここに寺を造り、その美しさにちなんで梵魚寺と名づけたらしいのである。黒田老師も、「実にいいお寺だなあ」と感嘆の声をあげることしきり。

梵魚寺のシンボルといわれる一柱門をくぐり、とくに許されて、大雄殿に入堂し、般若心経を読経し、回向した。折しも晩課がつとめられており、僧たちの読経の声と鐘の音が全山にこだまして、私どもを幽玄の境に誘った。

二十五日午前六時すぎ、ホテルを出て吐含山石窟庵（トナムサンソックラム）、吐含山仏国寺（トナムサンプルグクサ）に詣でた。

石窟庵に向う山の中腹で見る日の出のすばらしさは韓国随一の眺めといわれる。その日の出を見せてやろうという釈梵河・李焌秀両師の思いやりは、残念ながら通じなかった。今朝はあいにく曇天であった。

さて、石窟庵へ急ぐのは私どもだけではない。朝早くから老若男女の人影はひきもきらない。私は、石窟庵詣では、二度めである。

仏国寺の東北に位置する海抜およそ六〇〇米の吐含山の頂上あたりに石窟庵がある。新羅の

仏国寺の裏山にて

宰相金大城が新羅景徳王一〇年、七五一年に建てた。石窟庵は海東に面して造られた。つまり、日本の方角を向いている石窟寺院なのである。永いあいだ荒廃して忘れられていたが、一〇〇〇年あまりのちの一九〇七、八年ごろ郵便配達人が偶然に発見したという。

石窟庵のご本尊は、花崗岩の石造の仏像である。釈迦如来坐像とも阿弥陀如来坐像ともいわれているが、結跏趺坐する降魔像としての釈迦如来像とするのが広く行われている説のようである。高さ一、六米の蓮台の上に、二、七二米の仏像が安置されており、周囲には三八体の彫刻像がある。国宝第二四号。東洋の美女といわれる。このような完璧の美しさをそなえた石仏を私はほかに知らない。仰ぎ見て形容のことばを失う。聞くところによると、ある韓国カトリック教の枢機卿は、この仏像を仰いで、長い沈黙のあと、やがて、「私もやはり韓国人なのだなあ」とつぶやいたという。

釈梵河、李焌秀両師のご高配で、私どもはとくに許されて窟内に入り、般若心経を読誦し、回向した。古田博士は、石像の端に頭を垂れて長い祈念を凝らしておられたのは、実に印象的であった。

仏国寺は、新羅の法興王時代、五三五年創建の古寺である。慶州市から一六粁ばかり離れた吐含山の中腹にある。須弥山と西方浄土をあらわす韓国仏教寺院建築の精髄といわれ、国宝が六点もある。石橋、多宝塔、釈迦塔などたくさんの石塔は有名である。その華麗で端正な伽藍の配置とたたずまいは、日本の奈良の法隆寺や東大寺を思わせる。ずいぶん荒廃していたらしいが、先年、悲運の仏教徒朴正熙大統領の尽力によって復興されたという。大雄殿で読経、回向させていただいた。堂内に、次のような額が掲げられていた。「仏国寺大伽藍丹青大施主記

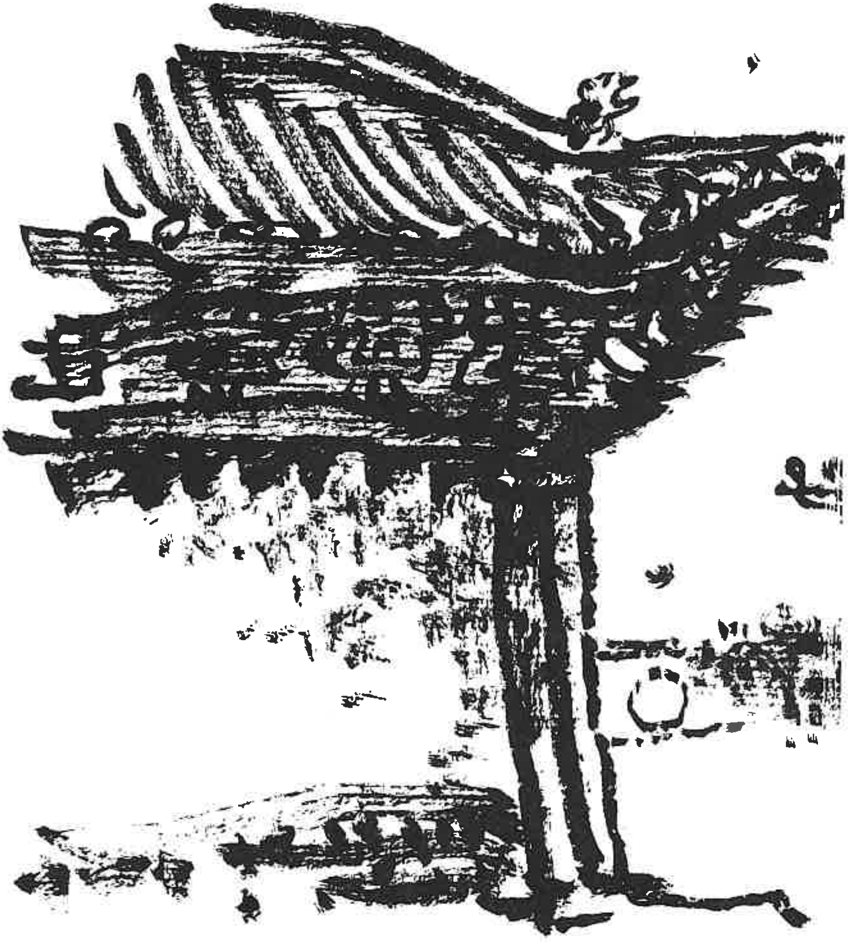
石南寺で

大施主　大韓民国　大統領　朴正熙閣下　施賜一金二百四十万整　以比功徳　南北統一　聖業完遂　国泰民安　世界平和　如意円満　成就大願　仏紀二九九四年　西紀一九六七年　丁未十一月二十二日」

余談だが、大統領といえば、こんなことも記しておこう。

私どもが訪韓する三日ばかりまえに、韓国ソウル特別市の大河、漢江（ハンガン）の橋梁が崩れ落ちて、数人の死傷者が出た大惨事が報道された。たしか首相は辞任し、市長もその座を降りた。金泳三大統領はクリスチャンであるが、どうも韓国仏教徒の一部のあいだでは、クリスチャンが大統領になると不吉なことが起きるというデマがひろがっているらしいのである。それを聞いたとき、私は一笑に付した。

帰国後、二、三日経って、読売新聞（一九九四年一〇月二九日付け）を見たとき、デマの内



容はともかくとして、そのようなデマがひろがっていたことは本当だったのだとあらためてその記事に注目したのであった。

「〔ソウル28日＝河田卓司〕韓国で橋梁（きょうりょう）崩落、遊覧船炎上と大型事故が続発している中、「大型事故の多発は金泳三大統領が青瓦台（大統領府）の敷地内の石仏を撤去したためだ」とのデマが広がり、青瓦台側がこれを打ち消すため二十七日、その石仏を公開するという珍しい一幕があった。金大統領は国会では野党から内閣総辞職を求められるなど苦しい立場にあるが、街のデマにまで対応させられ、神経の休まらない日が続いている。

問題の石仏は大統領官邸の裏山にある「如来座像」（高さ約百十㌢）。統一新羅時代の八世紀の作で、もともとは新羅の都・慶州にあったが、日本の植民地時代に寺内正毅総督が移したものだという。

街に広がったデマは、キリスト教信者の金大統領が昨年二月の就任後に石仏を撤去したため、事故を招いているとの内容。このうわさは前からあったが、今月二十一日の橋梁崩壊事故を機に広がっていった。

韓国では信仰心の厚い人々が多く、宗教がらみのうわさは意外なほど説得力を持って広がるうえ、一部外国紙までこのうわさを報じたため、青瓦台も無視できない事態になった。

石仏公開は韓国紙の青瓦台担当記者を対象に行われ、青瓦台側が「石仏はもともとの場所にそのままある」とデマを否定したが、異例の石仏公開は韓国人の精神世界の一端を垣間見せたともいえそうだ」。

石窟庵、仏国寺に拝登して、一旦、ホテルに引き返して朝食をすませ、そののち通度寺に向ったのであるが、通度寺での様子については先述のとおりである。

通度寺を下山して、通度白蓮舎、国立慶州博物館、興輪寺、芬皇寺に拝登、見学した。なかなかのハードスケジュールをこなしたものである。ご老体の古田博士、佐藤老師がお元気である。

霊鷲叢林念仏院（通度白蓮舎）の住持は通度寺僧伽大学元教授金円山和尚である。和尚の表情は精悍で、打てば響く頭脳の明晰さを感じさせる中年僧。四年ぶりの再会をよろこんだ。こじんまりした僧院の前庭には、強い晩秋の日射しのなかに木の実がむしろの上に干してある。坐禅堂の本尊は阿弥陀如来とか。部外者の入堂は固く禁ずる。日本の曹洞宗の僧堂と同じである。堂に「講禅堂」とあったが、講義と坐禅をならび行う堂の意味だそうで、禅を講ずる建物の意味ではないという。

国立慶州博物館は、国立中央博物館に次ぐ規模をもつ。池健吉館長を訪問。私などよりお若い、そしておだやかなお人柄とお見うけした。大急ぎで見学したが、韓国の歴史と文化がいかに仏教の深く長い影響のもとにあるかを知った。また、韓国の古代文化のレベルが予想以上にすこぶる高いものであることを真正面から見せつけられたおもいであった。

慶州博物館の西側庭園には、聖徳大王（七〇二―七三七）神鐘、一般には、「エミレーの鐘」（エミレーとはお母さんの意）とよばれる大鐘（重さ二五トン、黄銅一二万斤。高さ三三三糎、国宝第二九号）が吊されている。統一新羅、第三五代景徳王（七四二―七六五）の代に完成した。幼い女児を人柱として溶鉱炉に投じて完成した。そのため、鐘の音は「エミレー」と聞こえたという。悲しい物語りである。いまも除夜の鐘が、仏教僧侶や信者によって撞かれている。博物館は鐘の音だけを録音して館内売店で頒布している。録音は、周囲の交通を一時全面的に

ストップし、騒音を避けて行ったという。
博物館の近くに興輪寺址がある。興輪寺は、新羅法興王の時代、五三五年に、その工が始められたと伝えられる古刹である。いま、その寺址は、荒れた農地である。隣接地は、天鏡林興輪寺というお寺である。老若二人の尼僧さんが

漬物をつくっておられる様子であった。柔和で素朴なものごしになんともいえないなつかしさをおぼえて、カメラにおさまっていただいた。そして、私は、その寺址のあたりから許可をえて古い瓦の破片を一つ記念のつもりでいただいた。

芬皇寺（プンファサ）は、新羅、善徳女王三年、六三四年に建立された古刹である。いま、下部の三層だけを残した塼塔と開山堂などが残っている。境内の日本語の案内文によれば、石塔は、石を塼のように削って造ってあるところから、「模塼石塔」とよばれる。現在は三層になっているが、元来の規模が何層なのか正確にはわかっていない。一層の塔身には四面に仁王像が彫刻されている。また、境内には「芬皇寺復元鳥瞰図」が掲示してあったが、これによればかなり大きな寺域と十数個の堂舎をもつ大刹であったことがわかる。通度寺開山慈蔵律師も住職したが、統一新羅時代に登場した元暁大師（六一八―六八六）の寺として名高い。元暁といえば、韓国ではその名を広く知られている国民的高僧である。開山堂のまえには、寺の復興のために瓦の寄附をよびかける趣旨の文章が掲げてあり、なかには日本人も応じていた。

二十六日午前中、慶尚南道彦陽面の迦智山石南寺（ソクナムサ）に案内された。この寺院は渓流を目の前にした山麓にあり、十数棟の堂舎から成る尼僧の修行道場である。

新羅、憲徳王（八〇九―八二六）のころ創建された。開山は道義国師という。裏山に高さ三、五三米の石南寺浮屠（浮屠は石塔のこと。宝物第三六九号）があり、私どもは香を手向け、合掌、礼拝し、般若心経を読誦して、回向した。

歴史のうえでは、迦智山宝林寺が知られる。高麗時代の禅宗すなわち九山禅門の一つで、入唐求法僧道義国師の寺である。中国禅宗第六祖慧能、馬祖道一、西堂知蔵、道義に至る南宗禅馬祖系の法脈である。

さて、現在の石南寺住持は道門和尚という尼僧さんで、四〇年まえに入寺し、六年まえに住持となった。師僧で先代の老尼は九六歳の高齢で、ほとんどおもてには顔を出すことはないと

いう。

僧堂は、大雄殿と寺務所の奥にあり、部外者が入ることはもちろん近づくことも許されない。ただいまおよそ三〇人の尼僧たちが三年間の禁足を前提として修行にいそしんでいるとのことであった。

寺務所の一室に招かれて、道門和尚から松茶（ソンチャ）をいただいた。松茶は、松の実に砂糖を加えて水で煮るのだそうで、およそ三か月か四か月かけて出来上るという。血が清くなり、頭の働きもよくなるとか。ややアルコール化して、甘い舌ざわりであった。古田先生が裏山に竹は生えていませんか、竹筒に入れるとさらにおいしくなりますよと、にこにこしながら伝えると、住持も笑っていた。松茶は、韓国でもいまは珍しく、ほとんどつくることはないらしい。石南寺でも遠来の珍客にもてなすのだという。

石南寺には百人くらいの尼僧さんが修行生活を行っているとのこと。先年、私どもは、ソウル特別市の北方、北漢山国立公園の僧伽寺に詣でた。奇岩怪石の山中に、堂々たる伽藍と巨大な磨崖仏を擁する尼僧の大修行道場のありさまに圧倒されたものだった。韓国の尼僧界は健在である。そして、その将来はきわめて明るい。

はじめにも書いたとおり、日韓仏教、韓日仏教は、おたがいにいよいよ交流をさかんにすべきである。そして、おたがいを知り、おたがいに力を合わせて、仏教の興隆と両国の親善、世界平和の実現へとつとめたいものである。

（横浜善光寺留学僧育英会理事）

祝　曹溪宗第九代宗正老天月下猊下

駒沢女子大学学長代理、教授、文学博士　東　隆　眞

大韓仏教曹溪宗仏宝宗刹霊鷲叢林通度寺の老天月下方丈には、仏暦二五六〇年五月一三日、曹溪宗の第九代宗正に就任されたとおうかがいいたしました。まことにおめでとうございます。およろこびとお祝いを申しあげます。

ここに、新宗正老天月下猊下のますますの御健勝と曹溪宗をはじめとする大韓民国の仏教がいよいよ盛んになりますよう、心からお祈りいたします。

私は、日本の曹洞宗の僧侶であります。日本の曹洞宗は、韓国の曹溪宗とおなじように、中国禅宗第六祖慧能禅師をきわめて高く尊崇し、その名をとって宗名としています。

日本の曹洞宗には宗祖的な立場の祖師が二人います。一人は永平寺を開いた道元禅師（一二〇〇―一二五三）で曹洞宗高祖とよんでいます。いま一人は總持寺を創めた瑩山禅師（一二六八―一三二五）で曹洞宗太祖とよんでいます。この高祖、太祖を曹洞宗の両祖といいます。いずれも鎌倉時代の人です。韓国でいえば高麗時代

に相当します。
　韓国の曹溪宗の宗祖は太古普愚禅師（一三〇一―一三八二）（一説には普照国師知訥禅師（一一五八―一二一〇））というお方です。日本の曹洞宗の道元禅師より百一年おくれて登場し、一二九年ののちに遷化されました。
　曹溪宗と曹洞宗は、ともに北方仏教、大乗仏教の流れのなかにあり、共通点と相異点があると思います。私は曹溪宗についてはほとんど何も知らないので、曹溪宗のみなさまのご指導をいただいて学習していきたいと願っています。
　韓国は、中国とともに、日本の文化や仏教のふるさとであり、源泉であります。私たち日本人はこの恩恵を忘れてはならないと考えます。
　しかし、韓国と日本の長い歴史の交流のなかで、日本は韓国に対して蛮行の限りを尽くして来たのであります。私は第二次世界大戦当時はなにもわからない小学生でありましたが、成長するに及んでその事実の一端をいろいろの機会で学び知ることが出来ました。この点、私は日本国民の一人として仏教徒の一人として率直に懺悔しなければなりません。そして、今後は、おたがいに対等に友好と親善を重ね、世界の平和を実現する努力を重ねていかなければなりません。
　私たちは、一九九一年七月三十一日、通度寺へ拝登いたしました。ですから、このたびは二度めであります。これからも機会をいただいておたずねし、交流を重ねていきたいと思います。友好と親善は、まず、おたがいが、おたがいの国の歴史と文化を知り、行き来し、理解をすめていくところからはじまるでしょう。どうか、ご指導をお願いいたします。

心に残る名句

横浜善光寺留学僧育英会常務理事
龍光寺住職
佐藤俊明

百不当の一老

道元

人間、事をなすにあたり、暗中模索と試行錯誤はつきもので、努力が必ず報われるとは限らない。努力しても成果が挙がらぬからとて、そこで中止すれば骨折損のくたびれもうけに終わるだけだが、歯をくいしばってそこを突き抜けると、それまでのムダが全部生きかえって予想外の成果を挙げることができる。

弓で的を射てもいっこうに当たらない。しかし、その当たらない矢を何本も放って修練に修練を積むと、やがて当たるようになる。その金的を射抜いた一当は、それまでの百不当の力である。修行もその通りで、はじめは何をやっても得心（とくしん）がいかぬものだが、先哲に導かれ、経典に教えられて自分を掘り下げ実践を積み上げると、それまでの百不当の力、百不当の一老により一当を得るにいたるのである。「失敗は成功のもと」成功の一当は、失敗という百不当の一老によるものである。

一事をこととせざれば一智に達することなし

道元

私共の周囲には、豊かな才能に恵まれておりながら、才能のあるにまかせて、あれもやり、これもやりして生命力を分散し、結局は「八才覚（はっさいかく）の七貧乏（しちびんぼう）」で虻蜂（あぶはち）とらずの一生を終える人が決して少なくないのである。逆に、たとい才能には恵まれていなくとも、自らの能力に応じた守備範囲を堅く守って精力を集中、蓄積し、大きく自己啓発の実を挙げてる人も少なくない。だから、歴史上にその名をとどめている偉大な仕事を成し遂げた人は、みな一様に一筋の道に精進しているのである。

一つの事に全力を集中し、その努力を積み上げなくては、一智、つまり自分も納得し、

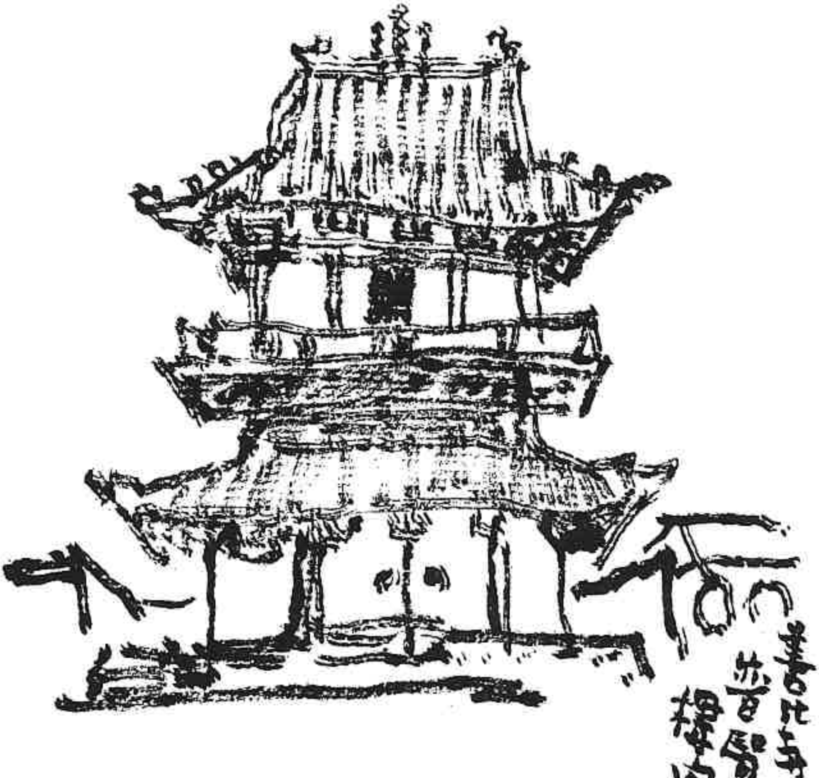
世人にも認められるゴールに到達することは不可能である。そしてそこに到る道のりは、「この道三十年」といわれるように、おおむね三十年というのが一般に共通していわれるところである。

人の聞かざるところを聞けることはありと雖も、他の聞けるところを聞かざるはなし。

懐奘

懐奘が道元禅師に参じたのは三十七歳の時だった。爾来、二つ年下の道元禅師に二十余年間、影の形にそうがごとく親しく随侍された。

母危篤の悲報に接した時、見舞いに行って間もなくだったので「一月両度、一出三日」の規制を超える状況だった。しかし、事は重大、今生の別れなればとて、大衆は協議の上他出をすすめた。が、懐奘は、「衆議重しといえども、仏祖の規範はさらに重い。いま悲母の人情に従って古仏の垂範に背かば、不幸の咎これより大なるはない。我は制戒を破って母を見送りせぬ」といって衆議を退けた。これほどなれば、道元禅師の教示は細大漏らさず聴取している確信があった。これがその言葉であり、禅師遷化の後、塔所（たっしょ）のそばを離れず、終生を禅師の著述の整理編さんに捧げたのである。



茶に逢うては茶を喫し　飯に逢うては飯を喫す

瑩山紹瑾

飛行機に乗って雲の上に出ると、下界は雨でも上空はからりと晴れた青空である。同様に、私共の日常はモヤモヤした分別妄想やドロドロした欲望の雲に覆われている。が、その雲を突き抜けるとすがすがしいさわやかな心がある。このすがすがしい心が、そのまま日常生活に活かされて、一挙手一投足が仏道にかなう。それを「平常心是道」というのであり、その姿は、茶を喫するときは余念雑念を交えず喫茶三昧に徹し、食事のときは食事の一行三昧になりきることである。

なんでそんな堅苦しいことが必要なのか。雑談しながらお茶のんでもいいじゃないか。テレビみながらめしを食ってもいいじゃないか。いや、久米の仙人でさえ、川端で洗濯している乙女の白脛をみて欲心を起こし墜落するのである。二途にわたらず、一行三昧に徹してこそ、すがすがしい心が保持できるのである。

人々悉く道器(どうき)なり

瑩山紹瑾

春になると百花爛漫として咲き競うのだが、花は一体誰のために咲くのか。人に見せるためか、鳥や虫を呼ぶためか。春を告げるといっても、早春に綻(ほころ)ぶ花もあれば、晩春をいろどる花もある。花は決して他の評価を期待したり、思惑を気にして咲くのではない。すべては本来具わった天分が時節因縁を待って開花するだけのことである。

人間も同じことで、人それぞれ個性や才能を持っているが、それは他人のためのものではない。その人その人に与えられた、かけがえのない天分である。その天分が時節因縁の順熟を待って開顕(かいけん)するのである。だから人の注目を浴びないからとて、しおれたり、人にもてはやされていい気になったりしてはならない。そんなことをとやかく思い煩うことなく、自己の本領、持ち味をいかに発揮するかに心を砕くべきである。与えられた天分は努力精進によって開花するのである。

〔目　　的〕

佛教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする

〔派　遣　先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA禅センター)
"923 S.Normandie Ave LA. CA. 90006 USA"
2. Zen Mountain Center of New York (NY禅センター)
"Box 197, Mt.Tremper, NY 12547 USA"
3. Wat Paknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok 10160 Thailand"
4. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成8年4月より一年間

〔給　　費〕

アメリカ・タイ及びその他の国における滞在に要する必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文(次項による)
   ○論題
   ①これからの国際交流と仏教の役割
   ②世界平和と仏教徒の誓願
   ③留学僧として私はこれを学びたい
   ④異文化の中で仏教を学ぶ
   いずれか一題を選ぶこと400字詰原稿用紙5枚以上(A4版タテ書き)

2.保証人と連署した願書　3.卒業証明書
4.履歴書　5.推薦書　6.健康診断書

〔募集人数〕

平成8年度　2～3名

〔願書締切〕

平成7年12月10日、事務局必着のこと

〔発　　表〕

平成8年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会
〒233 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第12回生

横浜善光寺 留学僧募集

平成8年度・1996

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。
ご希望の方はご応募ください。
詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程並びに細則をごらんください。

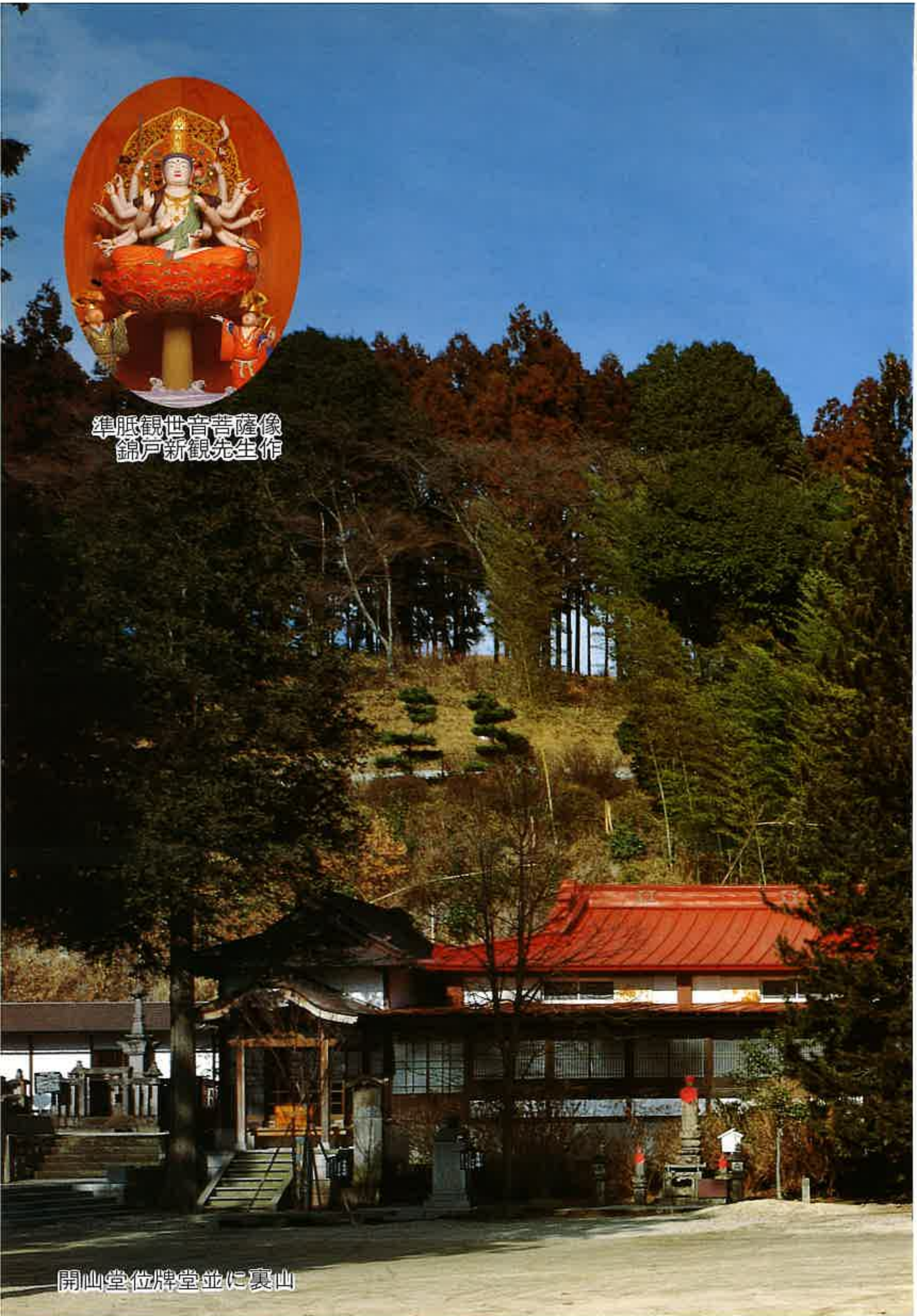
ZENKŌJI
YOKOHAMA

栃木県大田原

大田山光真寺

光真寺開運甲子大黒天

大田山光真寺本堂昭和 8 年黒田白純大和尚に依り再建



準胝観世音菩薩像
錦戸新観先生作

開山堂位牌堂並に裏山

檀信徒会館の床ノ間。

光真三十六世中興楳庵白純
大和尚画像

光真寺裏庭十六羅漢像と池

禄高1万2千石大田原城主の墓。本堂の脇にある。

昭和51年10月完成、鐘の重さ500貫毎朝5時50分に撞いている。

成寿山善光寺

開山棋庵白純大和尚
十七回忌法要

南澤道人監院老師

第十一回育英生に辞令交付

挨拶する光真寺方丈と善光寺方丈

参列の皆様

開山楳庵白純大和尚
十七回忌法要

南澤道人監院老師

第十一回育英生に辞令交付

挨拶する光真寺方丈と善光寺方丈

参列の皆様

横浜善光寺留学僧育英会　第十一回辞令交付式

古田紹欽博士が講話

開山楳庵白純大和尚十七回忌法要厳修

横浜善光寺留学僧育英会（黒田武志理事長）は二月十日午後二時から、第十一回育英生の辞令交付式を善光寺釈迦殿で挙行した。

式典に先立って善光寺開山楳庵白純大和尚の十七回忌法要が大本山永平寺の南澤道人監院の導師で厳修され、㈶松ケ岡文庫長の古田紹欽博士による記念講話も行なわれた。

開山楳庵白純大和尚十七回忌法要

開山十七回忌法要は南澤永平寺監院の導師で、出班焼香により懇ろに営まれた。法要後、南澤監院は、

「ご当山のご開山さま、楳庵白純大和尚十七回

忌法要を勤めさせていただき、大変有難いご法縁を戴き、心から感謝を申し上げる。夙にこちらのご開山さまであり堂頭老師のご先師であられる楳庵白純大和尚さまのご高名はご生前中承っていたが、直接お目にかかる機会もなく、何か遠い所に居られるご高僧というところで拝していた。たまたま私は現在、永平寺の監院という役にあり、こちらの堂頭さまが進めておられる留学僧育英会に理事というような責任のあるお役を頂戴した。そんなご縁でいろいろとご先代さまのこと、そしてまた、特にご内室であられたこちらの堂頭さまのお母さまのことなどをお伺いすることができ、何とも言えないご縁というか、そういったものを感じている。ご開山さまのことは皆さま方は当然熟知しておられると思うが、お母さまが内助の功大変誉れの高いお方であったと。しかも、私は長野県の更埴市の竜洞院の住職だが、お母さまは須坂市のご出身と承り、何か一層身近に感ぜられた。また、私事で恐縮だが、私の母は明治三十五年生まれで、戦時中私がたまたま寺を離れて軍籍に在ったおり他界したが、丁度私の母親とも一つ違いぐらいのお年であられると思い、そんなことが余計私の心に深く感ぜられた。

楳庵白純大和尚さまは大変立派なお師匠さまであられ、多くの寺を復興され、またご開山となられ、多くのお弟子さま方をお育てになられて、お寺のためはもちろん、ご本山のために、仏教界のために大変なご活躍をなさった。その法を受け継がれて、それぞれのお弟子さま方がご活躍されていることは、我々が常日頃尊敬して止まない、並大抵のことではないと思う。今日は大勢のご法縁のご老宿方、また檀信徒の皆さま方のご臨席をいただき、只今ご開山さまの十七回忌の法要を、宗門においては最高の儀礼である出班焼香で厳かに勤めさせていただくこ

とができた。
仏法は国籍も人種の違いも超えた、全世界に普遍的なものだ。その法縁により今日を生かさせていただいている。この喜びは何事にも換え難い。ご縁をいただいたからには、我々自身が、より良い法縁をつくることが仏法を信ずる者、仏道を歩む者の努めと思う。堂頭さまは国際的な事業を手掛けておられる。ご開山さまのお徳を受け継ぎ法のご縁に報いるということを身を以てお示しいただいている。大変有難いことだ。ご開山さまのお徳をおしのび申し上げ、仏法のご縁をいただいて今日生かさしていただいている喜びを、少しでも多く、仏法のために世界のために努力精進したいとより一層心に思った。ご当山のますますのご隆昌を祈念し、堂頭老師にご健勝でご活躍いただきたいと念願する。」と挨拶した。

採用された育英生は計六十一人に

宮本延雄理事（鶴見大学学監）の司会で辞令交付式が行なわれ、はじめに佐藤俊明常務理事が選考の経過を報告。さらに黒田理事長の導師により、育英生五人の弁道精進・法身堅固・道中安全・心願成就を祈念して仏祖諷経が営まれ、黒田理事長から一人々々に辞令と育英金が手渡された。
世界に活眼を開く人材の育成を目指し、善光寺の開創十五周年を記念して黒田住職が設立した同育英会は、昨年で十周年を迎えた。平成七年度・第十一回育英生として新たに採用されたのは五人で、これにより第一回から第十一回までに採用された育英生は六十一人になった。
辞令交付を受けた育英生は、龍谷大学大学院博士課程を終了しインドのカルカッタ大学大学院博士課程に留学した宇野恭章（やすあき）氏、

大本山總持寺祖院専門僧堂の修行を了えてアメリカへ留学する遠藤博因師、中国福建省の閩南仏学院講師を経て駒澤大学仏教学部に研究留学している湛如氏、日本で出家得度し曹洞宗僧侶として禅画・仏教美術の研究・普及に努めているポーランド人の如玄ノバク氏、中国人留学生で大阪教育大学大学院修士課程二回生の呂鉄氏。

古田紹欽博士が記念講話

古田紹欽博士

記念講話を行なった古田博士は、横浜の朝日カルチャー講座で道元禅師の『正法眼蔵』を長く講義していることを話し、「道元禅師の思いは私の人生に深く刻まれている。禅師の法恩を身に体している。その法縁でここへ参ったことを有り難く思っている」と前置きして、人生の一端を披露しつつ次のように述べて育英生を励ました。

「私は十歳で仏門に入った。貧乏な寺で、小僧が十一人いた。日曜日ごとに托鉢をして、やっと火井粥を食べて過ごした。栄養失調で皮膚病にかかり、寒中も足袋をはかず、あかぎれが痛くて風呂へも入れなかった。師匠の衣にすがって、学校へ行きたいと私が泣くので、師匠は辛うじて中学へ生かせてくれた。

金が無ければ学問はできない。しかし金があっても学問はできない。何としても、石にかじりついても、この因縁をいただいた限りは有

り難い、という思いが得られるようなことを人生の中で体験していただきたい。育英金を糧として、自分が納得のいくように使うことができたら、仏門に生きる者が共々に喜びとすることができる」

また東隆眞理事（駒沢女子大学副学長）は次のような激励の言葉を贈った。

「世界各地に民族紛争、地域紛争が絶えない。混迷・無秩序はいつまで続くのか。日本は次々に内閣が交代し、不安定な状態が続いている。兵庫県南部地震の大惨事はこの世のものではない。世の中には予想もつかないことが起きることを教えてくれた。この時代、仏教の教えを今さらながら尊く思う。仏教の真理をしっかりと胸に受けとめて、一日々々を大切に生きたいものと改めて願っている。

後ろ向きの学問より前向きの学問をして下さい。二十一世紀の仏教を明らかにする学問をして下さい。死んだ仏教ではなく、生きた仏教を学んでいただきたい。欧米でも仏教は多くの人々から関心と期待をもって、二十一世紀の指針として求められている。これからの新しい本物の仏教は、善光寺の育英生の中から生まれると確信している」

最後に本寺の光真寺黒田光純住職が「願心をもつことが大切だ。世界平和は一人の思いから芽生えてくる」と謝辞を述べた。斎座では地元選出の横山敏明宗議が挨拶し、友人の洞外文隆宗議が献杯の発声を行った。

楳庵白純大和尚と光真寺

善光寺開山・楳庵白純大和尚は昭和五十四年二月四日に世寿八十二歳で遷化せられ、本年二月十日、十七回忌法要が厳修されました。十七回忌に因み、楳庵白純大和尚と光真寺（善光寺の本寺）、また、『楳庵白純大和尚』（昭和五十七年十月一日発行、光真寺刊）より、〈楳庵白純大和尚を偲んで〉二篇を特別掲載します。

楳庵白純大和尚

白純大和尚は明治三十一年（一八九八）三月十五日、黒田駒蔵・タカの次男として栃木県宇都宮市にて出生。四歳（明治三十四年）の時、父が死去。その後母が大田原の光真寺三十四世服部愚白和尚と再婚（明治四十年）したので、以後愚白和尚の弟子として育てられました。明治四十一年十二月、光真寺の失火で寺町大久保町が大火となり、山門だけを残して寺のほとんどが焼失。その頃の愚白和尚は老齢に加えて白内症にて目を病み、住職として勤めも思うに任せず、さりとてタカ女との子もまだ幼少で、寺は惨澹たる有様でした。そこで永平寺で修行を積んだ白純和尚が光真寺三十六世住職に任ぜられたのです。大正十一年二十四歳の時でした。

翌年、仮本堂を新築、大正十四年に前角嘉（黒田方丈の母堂）と結婚。翌年には長男が出生（五歳で死亡）、男子八人をもうけました。

白純大和尚の一生は、寝ても覚めても「まず寺の復興を」と、人集めと寺の繁栄に努力を惜しみませんでした。七人の子どもは五人が住職、一人が会社重役、一人が大学教授、弟子や随身を入れると実に三十有余名。米国・ロスアンゼルス仏真寺、横浜市成寿山善光寺（黒田武志住職）、栃木県那須寺、がいづれも建立開山、東京都大田山別院桐ケ谷寺は中興開山です。光真寺の末寺はそれまで四カ寺に過ぎませんでしたが、前記の四カ寺に他に二カ寺を末寺に加えたので十カ寺となり、それぞれ弟子を住職にしています。「人づくり、寺づくりの名人」と評される所以です。本寺の光真寺は伽藍整備も整い、本堂、庫裡、地蔵堂、大黒殿等々、管内寺院最大の規模を誇る輪奐の美を造り上げ、「これがかつて人の寄りつかない殿様寺だったとは、当時のことを知らない人にはとても信じられないだろう」とは古老の語る言葉です。

生前の要職は、大本山總持寺顧問会会長、總持寺副監院、大本山總持寺復興局長、全日本仏教会事務総長、曹洞宗審事院院長、曹洞宗宗議会議員、駒澤大学駒澤会会長、国際仏教興隆会常任理事、日本宗教連盟参議、栃木県仏教会会長、等を歴任、大本山總持寺から西堂位を追贈されました。（順不同）

曹洞宗大教師、黄恩衣、赤紫衣の位を授与せられています。

光真寺縁起

光真寺は山号を大田山と称し、大田原家の菩提寺として天文十四年（一五四五）に創建された禅刹です。

大田原家中興の祖である第十三代資清公は宿

敵黒羽大関家を破り、城を中田原水口から大田原龍体山に移して大田原藩の基盤を確立すると共に、両親の菩提を弔うために寺堂の建立を企画し、四周に霊山霊域を探させ、ついに西方に巨木鬱蒼とし、風無きに枝は鳴り、水深く湛えた蛟龍の潜む深渕の如き幽池あるを知り、直ちに七堂伽藍を建立しました。そして資清公の実兄で、永平寺で修行され高徳の聞え高かった塩谷郡川崎の長興寺の麟道大和尚を拝請して開山第一世とし、寺号は父の法号「明庵道光」の光の字と、母の法号「真芳妙観」の真の字をとり命名したといわれます。爾来四百五十年、第三十七世光純（善光寺方丈の長兄）に至っています。

光真寺は開山以来三百石を拝領し、第二十世一時絶海大和尚の時代に五百石に加増され、明治四年の廃藩置県に至るまで三百三十年間は藩主の菩提寺として裕福な寺院でしたが、明治以後の百二十年は波乱の時代でした。戊辰戦争で火災に遭い、明治四十一年の寺町大久保の大火で再び全山消失してしまいましたが、第三十六世楳庵白純大和尚の代になり、現在の光真寺の見事な再興が果たされました。

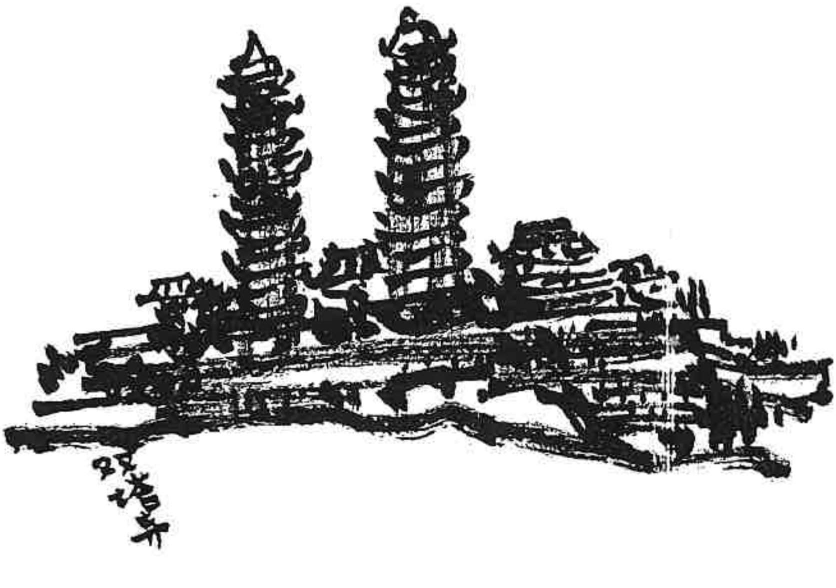
光真寺の建造物のうち、本堂は昭和八年に起工し竣工まで十カ年を要し、総けやき造りでその雄大さは当山随一です。鐘楼堂は度重なる火災に遭い、現在のは五百貫(約一八七kg)の大梵鐘を具した総けやき造りで、楳庵白純大和尚住寺五十年を記念して建立され、正面の桁には大田原市名誉市民関谷充氏寄贈の銅製の龍があり、「龍城の鐘」と称せられ〝北関東随一〟の名声を博しています。研修道場・檀信徒会館は一、二階に百畳敷の広間があり、集会、研修宿泊等に広く解放されています。その広さと機能性においては近隣に比類無いものです。以上三つの建物は今日の光真寺を代表するものです。

本堂裏手には龍体山が連なり、山腹に数百本の紫陽花が植えられ、その紫陽花に包まれるように世界平和を願う平和地蔵尊が奉安されています。

本堂西側の一段高い境内地には大田原城主霊廟が有ります。開基第十三代資清公は自らの廟を伽藍裏手の龍体山山腹光龍台に定め、爾来歴代城主とその妻子、第二十八代勝清公まで代々光龍台に葬られましたが、昭和に至り廟の風化損傷がひどく、昭和十五年に現在地に遷しました。廟は全て那須芦野石製の宝篋印塔型の大石塔で、大田原家の繁栄と豊かさを忍ばせ、市指定の重要文化財となっています。

開山歴住大和尚

開山　體翁麟道（たいおうりんどう）大和尚
二世　台山宗覚（たいざんそうかく）大和尚
三世　花岳昌馨（かがくしょうどん）大和尚



四世　大岸素蓮（たいがんそれん）　大和尚
五世　月峯堂岳（げっぽうどうがく）　大和尚
六世　北堂祖南（ほくどうそなん）　大和尚
七世　電庵呑孝（でんあんどうこう）　大和尚
八世　梅峯長頓（ばいほうちょうとん）　大和尚
九世　財庵電了（ざいあんでんりょう）　大和尚
十世　骨心普哲（こうしんふてつ）　大和尚
十一世　国相林的（こくそうりんてき）　大和尚
十二世　善観三響（ぜんかんさんよう）　大和尚
十三世　明道海天（みょうどうかいてん）　大和尚
十四世　泰林梅獄（たいりんばいがく）　大和尚
十五世　雲耕先端（うんこうせんずい）　大和尚
十六世　大林江道（たいりんこうどう）　大和尚
十七世　海岸慈雲（かいがんじうん）　大和尚
十八世　大峯全龍（たいほうぜんりゅう）　大和尚
十九世　如得龍水（にょとくりゅうすい）　大和尚
二十世　一時絶海（いちじぜっかい）　大和尚
二十一世　何国百川（かこくひゃくせん）　大和尚

二十二世　活然露柱（かつねんろちゅう）　大和尚
二十三世　青山白雲（せいざんはくうん）　大和尚
二十四世　懐州先山（かいしゅうせんざん）　大和尚
二十五世　東谿耕雲（とうけいこううん）　大和尚
二十六世　東国先峯（とうこくせんぽう）　大和尚
二十七世　寂海道安（じゃかいどうあん）　大和尚
二十八世　龍屋魏慶（りゅうおうぎけい）　大和尚
二十九世　蔵山祖隆（ぞうざんそりゅう）　大和尚
三十世　覚思了愚（かくあんりょうぐ）　大和尚
三十一世　了果大梅（りょうかたいばい）　大和尚
三十二世　靈覚了源（れいかくりょうげん）　大和尚
三十三世　黙音大愚（もくおんたいぐ）　大和尚
三十四世　雲巌愚白（うんがんぐはく）　大和尚
三十五世　覚円白明（かくえんはくみょう）　大和尚
三十六世　中興　楳庵（ばいあん）白純（はくじゅん）　大和尚
三十七世　光純俊雄（こうじゅんしゅんゆう）　大和尚

金印を持つ皇女像

『楳庵白純大和尚』より

わが先師のガードマン白純大和尚

大本山總持寺監院

大道晃仙

わが先師、英仙老和尚が遷化したのは昭和三十一年一月二十六日で、世寿八十一歳であった。早いもので来る十月二十五日、二十六日の両日、紫雲台猊下を拝請して二十七回忌法要を修行することになった。

さて、先師が七十六歳の老軀をもって總持寺監院に就任したのは昭和二十六年六月の下旬のことであり、雲仙丸に乗って釧路港を発った老父の姿が今でもはっきり思い出される。大戦後の一山復興の重責を担っての監院の就任であり、先師は復興局の総裁に、その局長に副監院黒田白純老師を挙げ、東奔西走の日々を過したのであった。監院在任四ケ年の間、先師の側近にあって補佐役をつとめられたのが黒田白純老師であった。春風和顔の老監院と威風堂々闊達自在の白純老師は全く名コンビであったと思う。特に昭和二十七年十月、時の貫首渡辺玄宗猊下、大祖堂再建の発願なさるるや、先師は白純老師

と共にその実動に入られた。陰に陽に老監院を助け、時には代行をつとめられた白純老師の姿がなつかしく思い出される。

白純老師には男のお子が七人あられた。住職の留守に、寺庭をしっかり守り、大勢の子供を養育され、檀信徒によく尽された奥さん。その奥さんに留守を一任して活躍された白純老師の風格をなつかしむ昨今である。白純老師は子育ての名人であり、今日大勢のご子息がそろって宗門にあり、縦横の手腕を発揮しておられることは、誠に敬服の至りである。

さて、昭和三十年八月初旬、先師は監院満期により帰山、自坊においてその報告法要と亡き母の七回忌法要を修行し、特に母の法要の導師を私は白純老師にお願いした。白純老師の堂々たるお導師の姿、朗々たる香語の音声は堂中を圧するが如しであった。

法要が終わり、本山を代表して白純老師が立ち、曰く「私は四年間、監院さんの側近にあってお世話申しあげた。私は幸いにして柔道五段で、監院さんのガードマンの任務を充分果すことが出来た。私は今回本山を代表してお送り申し上げた。檀家の皆さまに監院さんをお渡し申し上げます。今後はよろしく」と申したるところ、古い檀徒の一人であった中川久平氏、すっくと立って曰く「貴僧は柔道五段と聞き及ぶが、拙者は山岡一刀流六段錬士である。これからは拙者が老僧の用心棒をつとめるによって、貴僧は安心して本山にお帰りあれ」と…。その一瞬、白純老師と久平居士の当意即妙の問答に満堂の檀信徒一同爆笑大爆笑…。先師また破顔微笑…。

ここに粗文ながら思い出の一端を記し、白純老師の品位増崇を祈念申し上げる。　合掌

（昭和五六年一月二十六日夜　釧路市定光寺住職）

『楳庵白純大和尚』より

僧宝的性格を顕示された祖翁

仏真寺内　グラスマン徹玄

各地の禅センター、寺院、あるいは仏法を参究する学人は、三宝の中のいずれかの特徴をより多く示すものです。それは禅の指導者諸老師方についても言えることです。思うに祖翁楳庵白純大和尚は、僧宝的性格を強く顕わしておられると存知ます。仏宝的あるいは法宝的性格は、大概の寺院に見られる特徴ですが、僧宝即ち僧伽は、志を同じくする者達の協同体の人間関係、その協調が要訣ですから容易なものではありません。実際、人生は人と人とのつながり以外のものではないのですが、大概の僧侶、僧堂、寺院は仏宝的もしくは法宝的性格が強いものです。

白純大和尚は、天性僧宝をわがものにした人でしたから多くの要職を歴任され、その指導力を発揮されたものです。

私は一九七〇年（昭和四十五年）に大和尚に相見いたしました。私は日本語を全くといってよいほど解さず、大和尚もまた英語をほとんど話しませんでした。しかし互いに意思を通じ合うことはとても容易でした。互いにいらぬ気を

遣ったり、わざとらしい態度は全くなく、極めて自然に話し合ったものです。それは互いに思い遣り、熱のこもった会話でした。

白純老師の膝下に暫く過させていただき、高祖道元禅師、太祖瑩山禅師を貫き、嫡々相承し来った曹洞禅の伝灯に深く触れることができました。また流動的な世界の動向に対する確かな眼とその中での仏法宣揚の赫灼たる情熱に打たれ、勇猛心をさらにふるい立たせられたものです。また白純老師の「愛語」には強く打たれました。

老師は誰れかが他人のことを非難し、自分でもそれを認めたとしても、決してその人を叱責せず、時間をかけて解決しようと努力しておられました。かつて犯罪をおかした人でも責任をもって引き取って世話をしたり、どんな人にでも縁ある人にはわけへだてなく暖かく接しておられました。来山された方には老師だけでなく、家族全員が誠心誠意尽していました。それは個人的なはからいを捨てた真心と奉仕の生活でした。白純老師はまた何か事を企てると、絶対の新年をもってそれを成就されました。その際必要な経費、金銭的な事柄にはまるで無頓着で実行しておられました。檀家や信者の方への奉仕に必要な費用は必ずや与えられるという信念でもって生きておられましたが、そのような生きざまは、私の知る限り希に見るものでした。

私は白純老師には特別の親近感を抱いております。老師が学人を接化するやり方は、公案を使ったり提唱したりという従来の型にはまったものではありません。実生活の中で法を説いておられました。老師の膝下にあって弟子達は薫陶を受け、不知不識のうちに老師流の物事のとらえかた、対処の仕方を吸収し、自然に身につけてゆくのです。老師の中からにじみ出るものを吸収し、自分の血となし肉となして、やがて

確固たるものとするのですから年月を要します。
しかし、それこそ本当の嗣法と申せましょう。
私は白純老師に対して、今生で逢うべくして出会ったのだという宿世の因縁を強く感じます。
一九七〇年に初相見したにもかかわらず、祖翁との因縁で前角老師の弟子となったのだという気がしてなりません。最近読んだものに、子供は両親よりも祖父母の気質をより多く受けつぐものだとありました。私の思考方法や行動様式は師父前角老師よりも祖翁白純老師のそれに近いものです。一方師父と小子徹玄の間には相違点ばかりが目につきます。しかし、それだからこそ本師として仰ぐ因縁もまたあった訳です。
本師との強い絆は多くの相違点を越えています。が他方では先述の如く祖翁白純老師に酷似していると思います。それはまるで老師の生まれかわりではないかとさえ思われます。できればそうあってほしいと切望するものであります。

「世界に仏法光明を」

――留学僧育英会の総会開く――

平成六年に創立十周年を迎えた横浜善光寺留学僧育英会の第九回総会が十一月二十七日午後二時から善光寺で開催された。席上、来年の第十一回育英生の辞令交付式を二月十日に執り行うことが発表された。出席した育英生たちは、育英会の名に恥じないよう学問と仏道に精進努力することをそれぞれに誓い合った。

総会に先立ち黒田理事長の導師により本堂で本尊上供が営まれた。法要後、佐藤俊明常務理事（千葉県柏市・龍光寺住職）が挨拶し、「第一回総会の時、育英生はたった二人だった。今日こうして大勢の皆さまのご出席をいただくのを見て、今昔の感に堪えない」と述べた。また三月に挙行した創立十周年記念式典を振り返り、黒田理事長が権大教師に補任されたこと、韓国・通度寺の老天月下方丈を式典に迎えたこと、来日への答礼と老天方丈の曹溪宗宗生（管長）就任祝いのため訪韓したこと、これまでに育英生の総数が五十七人になったことなどを報告した。

東隆眞理事（駒沢女子大学副学長）は「本会は宗門の内外を問わず、多くの方々のご理解とご協力により順調に歩んできた。この十年間、何の問題もトラブルもない」と挨拶。「本会は黒田理事長の修行時代の思いに端を発してる。きのう今日できたものではない」と述べ、さらに次のように激励の言葉を贈った。

「育英生の皆さまは、それぞれのお立場で、明日の仏教界を担う人材として、世界平和を実現する人類の一員としてご活躍いただかなければならない。貴乃花関は横綱就任の際、不撓不屈、不惜身命と言った。この言葉は黒田理事長の信念でもある。

育英生の皆さまは、黒田理事長のように大きな誓願を抱いて頑張っていただきたい。数年のうちに育英生は百人を超えると思う。世界各地に同じ思いを抱く人が育つことになる。これは大きな力となるであろう」

育英生が決意と抱負を発表

総会では黒田理事長が感謝御礼の言葉を述べた後、富永豊重総代が「育英生の皆さんが早く立派になって私たちに法施を下さるようになっていただきたいと願っている」と挨拶。桐元大智事務局長が育英会の平成六年度行事を報告。出席した育英生十三人が自己紹介を兼ねて自らの決意と抱負を発表した。

協議決定事項は、まず第十一回育英生の発表は来年一月十日、その辞令交付式を二月十日に執り行い、記念講演は財団法人松ヶ岡文庫長の

古田紹欽博士を予定。併せて善光寺開山白純大和尚の十七回忌法要を、導師に大本山永平寺の南澤道人監院を拝請して営む。また来年二月に機関誌『成寿』第二十四号を「永平寺特集」号として発行。育英生の論文集（第二集）を九月に発行するなど。

この後、第九回育英生の東京大学大学院生・李鐘徹さん（韓国）と第五回育英生の臨済宗妙心寺派退耕院副住職・山本浄月さん（尼僧）の二人が、それぞれ育英留学の思い出と現在進めている研究内容や自らの決意などを発表。黒田理事長は「国境を超え、大乗小乗を超えていかねばとの決意を聞いた。仏法の光明を世界中にともすなら、大きな力になっていく」と感想を述べた。

閉会の言葉を述べた寺田伊佐武総代は「きつい・汚い・苦しいを3Kというが、私はこれを感激・感動・感謝と読み換えている。世のため人のために尽くすことがこの世に生まれた甲斐である。クラーク博士はたった一年で多くの人を育てたが、黒田理事長は日本のクラーク博士といっても過言ではない。皆さんは井戸を掘った黒田理事長のことを忘れてはいけない」と話し、最後に黒田理事長は「花を育てるのは一年、木を育てるのは十年、人を育てるのは百年というつもりで頑張っていく」と決意を込めて結んだ。

第九回横浜善光寺留学僧育英会

総会ご挨拶

第10回生　中国　嘉木揚凱朝

皆様、今日は。いつもお世話になっております。わたくしは今愛知学院大学大学院の宗教学科で日本仏教を勉強しているチベット仏教の僧侶嘉木揚・凱朝と申します。

私は善光寺育英会の理事長黒田武志先生を始め、皆様のおかげで去年の十月に愛知学院大学大学院に聴講生として日本にやって来ました。それからこの一年間学校の先生や、友達等に色々お世話になって、今年の十月二十日やっと大学院の修士課程に合格することが出来ました。

私はこの一年間心から感動したことが沢山あります。なんと言っても、善光寺育英会の奨学金をいただきましたおかげで日本に留学求法する機会が与えられたことです。特に大変感動したことは去年の六月十八日、黒田先生と佐藤先生は私の留学手続きのためにわざわざ北京雍和宮（チベット仏教の寺院）に来てくださいました。六月の中旬は北京の季節の中でもっとも乾燥してとても熱い時です。先生たちはどうしてそんなお忙しい時に北京にいらっしゃいましたかと

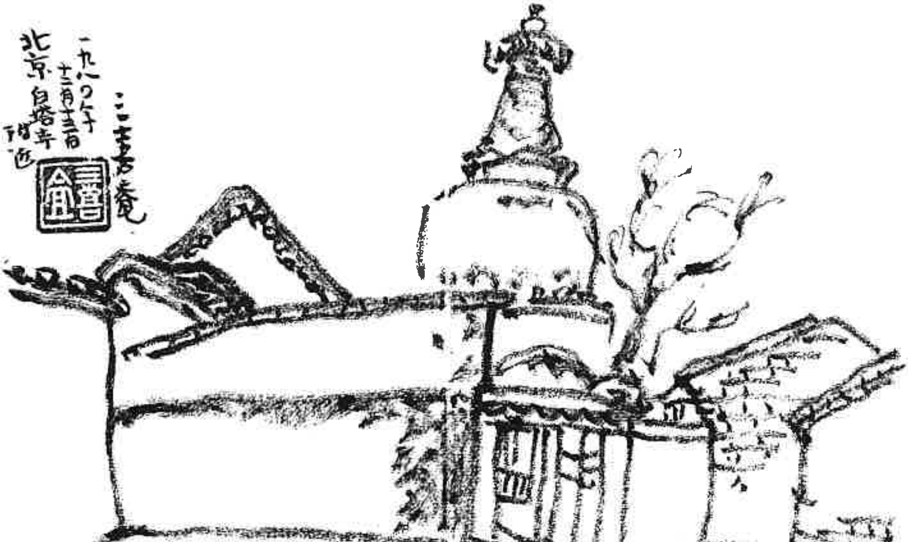
言えば、仏教のため、世界の平和のため、仏法興隆のため、世界仏教の青年僧侶達の育成のため。私はそう思っております。先生達は本当に菩提心を持っていると存じます。仏教の交流は確かに国や民族あるいは宗派の違いを区別せず、私はそう考えています。

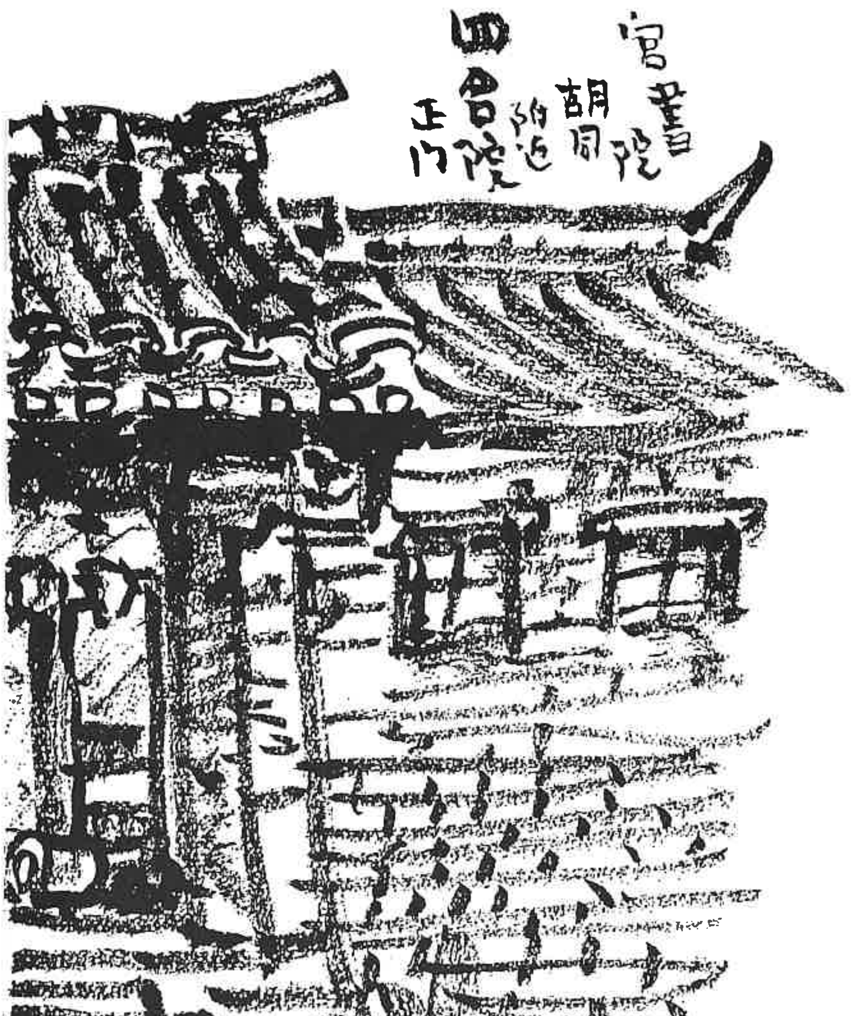
若し世界の人々がみんな黒田先生達や善光寺の育英会のメンバーの人達のように發菩提心を持つようになれば、お釈迦様や諸仏の教えの通りに『諸悪莫作、衆禅奉行、自浄其意、是諸仏教』そのように実現すれば世界から戦争がなくなると思います。

私も新しい気持を抱いて頑張りたいと思いますので、どうぞ今後も先生達ご指導よろしくお願いします。簡単ではございますが、これで挨拶を終らせていただきます。有難うございました。

合掌

平成六年十一月二七日




官書院
胡同
附近
四合院
正门

善光寺住職
正教師 黒田武志
補任権大教師
平成六年八月五日
管長 梅田信隆

善光寺住職
権大教師 黒田武志
可黄恩衣
平成六年十月十三日
管長 梅田信隆

お便り

「権大教師補任」おめでとうございます

中村　元先生

このたびは御開創二十五周年記念の御法要、おめでとうございました。また御老師さまには権大教師の栄位に御補任になられました由、御栄誉の極み、ここに謹んでお祝い申し上げます。

葉　阿月先生

其の後相変わらず御清栄にて御活躍なさいますこと嬉しく存じます。成寿第二十三巻をいただき、三月には留学僧育英会設立十周年記念式典、五月には貴寺開創二十五周年記念大会を盛大に行いましたこと、特に八月、黒田老師が御栄誉な権大教師に御補任なさいましたことを拝知し、この小島の一角から誠意こめて、お慶いの念を捧げますと共に、今後も又益々御健康にて、御立派な活躍を続けますようお祈り申し上げます。

新井勝龍老師

開創二十五周年、育英会十周年を迎えられたこの御事、御送与頂いた『成寿』

で知り、誠にすばらしいこととお喜び申し上げます。又権大教師に就任されたとの御事、心よりお慶び申上げる次第であります。今後の更なる御発展を祈念いたします。

神田重陽老師

成寿二十三号のご恵送にあづかり誠にありがとうございました。又権大教師のご補任御祝申し上げます。

佐藤達玄老師

この度は善光寺様開創二十五周年を迎えられ、また、権大教師に補任なされたこと、お慶び申し上げます。一箇半箇の接得に生命をかけた宗祖の御心を現代に生かされて、益々御発展あらんことを切に願い、老師の栄誉を称え御祝い申し上げます。

團野弘之老師

成寿第二十三号をご恵贈下さいまして有難うございました。育英会設立十周年記念式典の様子解りました。大変ご苦労様でした。宗門でもできない大事業お骨折りのこと有難うございます。又権大教師黄恩衣着用、誠にお目出度うございます。どうぞご自愛下さい。

福山諦法老師

今般は御寺開創二十五周年そして育英会設立十周年、重ねてご老師権大教師

補任等誠におめでたくお慶びを申し上げます。今後益々御法身堅固に御活躍あらん事を御祈念申し上げます。

沖田玉映尼師

平生より何かとお世話になって居ります。成寿二十三巻秋季号を賜り有り難く御礼を申し上げます。其程は開創二十五周年記念祝典並びに留学僧育英会十周年記念式典の特集をさらに改めて拝読させて頂き、次々と大業績なされ、いつもびっくりするばかり、ただただ敬服するのみでございます。ご開山であられます楳庵白純大和尚、ご生母様の三回忌のご供養になによりの報恩行持になられたのではないかと存じます。さらに其度は権大教師にご推挙され、誠にうれしく心からお慶び申し上げます。

老師様にはご尊躰をおいといになられ、益々ご活躍していただきたく、陰ながら念じてやみません。

島津源之殿

『成寿』秋季号を拝受、拝読させていただきました。記念式典が盛会に円成され、かつ権大教師に補任なされました由、誠にお目出とう存じます。日本佛教の祖である聖徳太子の像が貴寺に奉安されますことは大変意義深いことで、関東における太子信仰が盛んになりますようお祈り申し上げます。

斎藤　稔殿

成寿秋季号御恵贈賜り厚く御礼申上げます。いつもながら御活躍を精力的になさって居られる御様子、心から敬意を表します。又この度は権大教師に御栄進の由、心から御慶び申上げます。今後益々の御活躍を祈っております。

田上太秀殿

この度、「権大教師」にご就任された由、心から慶賀申上げます。今後の佛教界、宗門におけるご活躍と御尊寺檀信徒へのご教化との益々盛隆ならんことを祈念します。

奈良政子殿

記念すべき「成寿」秋季号お送り下されありがとうございます。また権大教師御栄進、心よりお祝い申し上げます。体調悪く二十五周年記念式典を拝見できず本当に残念に思いましたが、この記念号でその一端を拝見する事が出来て心から喜んでいます。これから三十年、四十年と続く歴史の重みに花を添えることでしょう。

誰にでも出来るものではない栄光が一段と輝きをまし、留学生の功績と共に善光寺の創建の意義を深くかつ大きなものとすることでしょう。何卒、御身御専一に御精進下さいませ。

鶴丸慶子殿

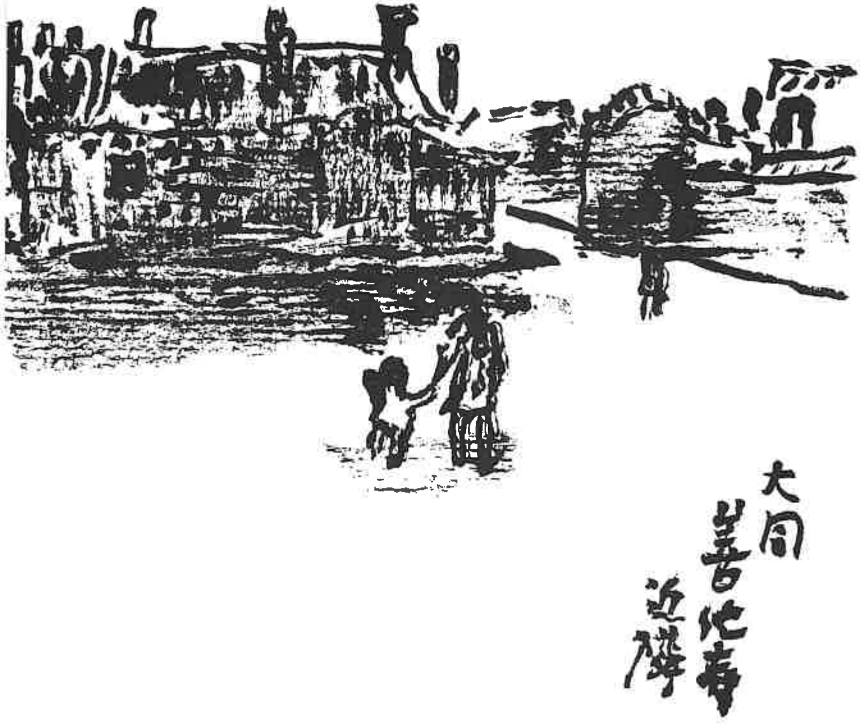
黒田住職様には此の度権大教師に補任されましたとの事、誠にお目出たく心

からおよろこび申し上げます。益々の御活躍をお祈りしております。「成寿」大変立派な御本で表紙やあちこちの佛画の美事な事、又沢山の写真があってありがたいお話も楽しく拝見させて頂いております。誠にありがとう存じました。

太田好信殿

先般善光寺留学僧育英会設立十年、並に成寿山善光寺開創二十五年を迎えられましたことを先づお喜び申しあげます。更に権大教師という栄誉ある御役につかれましたこと重ねてお祝い申しあげます。

私ごとで恐縮ですが春から秋にかけて私の親族、盟友の葬儀、愚妻の交通事故（軽度）等が相次ぎ、八十三歳の私は精神的打撃が脳神経に影響し思考力、判断力が鈍り、日常生活が何となくぎごちなく成りましたが現在は平常をとり戻し、下手な字ですが手紙を書くことが出来る様になりました。数年来の習慣で朝の散歩はかかすことなく続けて居りましたが、食事以外は自室に籠っておりましたとき、机上の「成寿」に手がのび無意識に拾い読みしているうち、いつの間にか熟読。それも目次を選んで読みましたが何号の何処を読んだか記憶は定かでないが、体内に力が沸き起ってきたのは「成寿」即黒田ご老師様のおかげと感銘し、感謝の念にたえません。今後ともご指導、ご厚誼賜りたくお願い申しあげます。


大同
善化寺
近隣

砂漠と草原のモンゴル共和国の旅

ニューヨーク州立大学教授　伊藤　博

首府ウランバートル

北京を出た飛行機はモンゴルの首府ウランバートル上空の悪天候で北京に戻り、翌日やっと待望のモンゴル入りを果しました。空港に降り立ち、出迎えに来ている大勢の人達の中に入るとまず土の匂いがし、あーやっと大自然の中で暮している遊牧民族の国へ来たのだと思いました。

出迎えに来ているはずの旅行社のガイドは見当らず、結局日本の海外青年協力隊員で日本語を教えている方と相乗りしてウランバートルの中心地にあるホテルに着きました。元共産主義国のサービス業は大変悪く、例えば一流ホテルのレストランでも一人分のパンにつけるバターにまでそれぞれ別に値段が付いており、食べて

も食べなくても値段が加算されていたりします。これも最近迄共産主義の国として知られていたモンゴルの一端だと痛感しました。

ウランバートルの町は工業の中心である事もあって都会の雰囲気は充分あります。（全人口二百十万、人口の五〇パーセントが町に住み、その四分の一がウランバートルに住んでいます。）特に年一度のお祭の時期でもあったので活気に溢れていました。

七月十一日は遊牧民の日に当り、三日間お祭があり、各地で遊牧民が集まり御馳走を食べ競馬や相撲を競います。地方で勝ち残った者がウランバートルの中央国立競技場でナショナルチャンピオンシップを競います。勝者は英雄としてもてはやされます。伝統的舞の他、競馬・弓道・相撲どれを取っても大平原を馬で駆けめぐり弓や鷹で狩をし、素朴なスポーツとして草相撲が発達した事が実感を持って感じられます。

七月中旬に三日間祝日が続き国中がお祭ムードになります。相撲は芝の国立競技場でいく組もの力士がお互い競い合い、日本の相撲とレスリングを組み合せた様な物で土俵は無く相手を倒す迄闘い、その前後の儀式は日本の相撲の様に様式化されたかなり複雑な物です。弓道で面白いと思ったのは、一列に並んだ弓士が百メートル程離れた的を目がけて弓を射るわけですが、的は五センチ位の草で編んだ物で地面に置いてあります。そのすぐ後に多数の男女の審判員が並び的に当ると歌を唱いながら両手を高く上げて射手に合図するという事です。驚いた事には矢が飛んで来るにも拘らず、数十人の審判員は巧みに身を交わし歌を唱い続けている事です。一番爽快なのはやはり大平原に展開される競馬でした。特に子供の騎手が自由自在に馬を駆け巡らす風景は西部劇その物で、しかもいかに馬が生活に密着しているかを実感しました。緑の

平原に点在する白いパオはとても印象的で、その脇を駆け巡る騎手は昔のジンギスカンやクビライカンを想像させます。

活気に溢れている様でもその根底を見ると政治経済全てを依存していたソ連の崩壊と統制経済から自由経済市場への移行は物質身心共に多くの混乱を招いている事はすぐ解ります。店の商品、特に国産品は乏しく街角の商店では中国とかシンガポール等の外国製品が多いのが目に付きます。一九九〇年の無血の民主化革命、そして一九九二年二月の新憲法公布は僅か三百人足らずの青年の新しい国造りとして始まったわけです。しかし七十年以上続いた社会主義体制の余波はあまりにも大きく、経済不振の他価値観の急激な変化で社会が混乱しているのが解ります。

ゴビ砂漠の遊牧民

モンゴルと言えばアフリカのサハラ砂漠と並んで有名なゴビの砂漠が中国との国境にあります。ロシア共和国との間には長さ八百キロもあり一番深い所では千六百メートルもあるバイカル湖があります。その水量は世界の淡水の二〇パーセントも占めており、この湖の四五パーセントがモンゴル側にあります。モンゴルの気候は全体に大陸型で冬は厳しく夏は蒸し暑いですが、アルタイ山脈を西に背負う森林と草原地帯は放牧に適しております。

我々は先ず南ゴビ迄飛びました。純粋の砂丘は僅か全体の三パーセントにすぎず、空から見る砂漠のほとんどは雑草が生えている土漠で、日本人がイメージとして持っている砂漠とはほど遠い物でした。但し砂漠特有の動植物がおり、更に印象的だったのは至る所にラクダと羊が放

牧されている事でした。ゴビの砂漠でガイドと車の運転手と一緒に砂漠に点在するパオ三カ所に寄りました。パオは放牧民特有の住居で木で枠組を造り、羊毛のフェルトでその上を包み込み、最後に白いキャンバスでカバーがしてあります。中には中央にストーブがあり、廻りにベッドや椅子等家財道具が全て置いてあります。昔は父系大家族主義でしたが、十九世紀になり家系より役職が重要視される様になり現代のモンゴル人はほとんど家系は解らないそうです。家族構成も夫婦と子供単位で夏は白い折りたたみ式のパオに寝起きして絶えず牧草を求めて移動しますが、冬は厳しく一定の場所に家畜小屋を作ってその廻りで数家族が生活します。面白い事には一番若い男の子が両親の家畜を引き継ぎ、長男・次男は平等な分前としての家畜をもらった上、独立分家する習わしだそうです。女の子は嫁に出すそうです。

モンゴル人の名前には姓がありません。私達の知人でワシントン・モンゴル大使館駐在の外交官はダルジャビン・サンダグと言いますがサンダグは彼の名字ではなくて彼の父親の名前です。ダルジャビンは彼が生れた時もらった名前で、彼の子供は生れた時の名前の後にダルジャビンと付きます。次に孫の名前にはもはやダルジャビンというのは付きません。従って我々の知人のサンダグはミスターサンダグでもなく、ミスターダルジャビンでもなく、ただサンダグと呼びすてにする習わしです。サンダグという名前が二代以上続く事はないわけです。名前に関する限り先祖崇拝がない様に思えますし、又遊牧民族ですので一カ所に家族のお墓を維持する習慣もない様ですが、昔は先祖崇拝の習慣がありました。

我々もパオに一泊しましたが居心地はなかなか良いでした。ガイドも運転手も一面識も無い

家族を訪れ、話に聞いていたモンゴルで一番有名な飲物である馬乳を一度試してみたいと思っていたのでガイドを通じて頼むと、白い少し発酵したミルク状の飲物と、馬乳やラクダの乳から作ったチーズを御馳走してくれました。ヨーグルトのような味のする馬乳の他に羊の肉も一緒に出してくれる家族もありました。突然見知らぬ家に行くのですが、ほとんど用件を言わなくても客を接待するという習慣は砂漠の遊牧民族の共通点だそうです。その背景には厳しい砂漠の中で旅人をお互いに助け合うという必要性から来ています。半ば当然のように食物を出してくれるし、お礼をする習慣も無いらしくこちらの感謝の気持ちで出すプレゼントに対してもありがとうと言う習慣も無い様です。ガイドに聞くと相手もお礼の品をもらう事は期待していないし、又上げる習慣もないと聞き驚きました。但しこの様な見知らぬ旅人を接待する習慣もだ

んだん薄れてきているると後で聞き少し淋しい気持でした。

共産主義経済の崩壊と共に失業が増え労働人口の一五パーセントに当る十五万人が失業していると言われています。又統制経済から価格自由化に移行した結果激しいインフレにも見舞われ一説には年間一五パーセントも上がっているそうです。その結果都会の住民はほとんどがアパート住いですが、特にサラリーマンや高令年金者は日用品も買えず困っております。貧富の差が激しくなった結果、特に犯罪が増え、その深刻さは社会問題になっております。社会主義政権の下では元のソ連のように治安の良さを誇っていたモンゴルでしたが、最近では犯罪率は年間三〇パーセント以上上がっていると聞いております。今迄はドアに鍵をかける必要がなかった市民も最近は物騒だから気をつけるようにと言われているそうです。事実我々と一緒に行った女性の旅行者もウランバートルの町中でいやがらせをされたと言っていました。

カラコルム遺跡へ

次にウランバートルから西に四百二十キロ程離れた所にあるモンゴル大帝国が築いたカラコルムの遺跡にガイドと一緒にジープで出かけました。飛行機で行くはずでしたが燃料不足で空と陸の定期便は出ておらず、急拠ジープに変更したわけです。全国土の八五パーセントを占める遊牧地帯を走って見る広大な草原とその中に点在する真白なパオはとても印象的でした。但しガイドも運転手も一回も行った事がないらしく遊牧地帯を迷い続け野宿をするはめになり、ジープの中で寒い一夜を明かせねばならず閉口しました。この様な事は頻繁にあるらしく他の日本人旅行者も同じ様な体験をしたと言っておりました。この事でも解る様に運送に限らず通

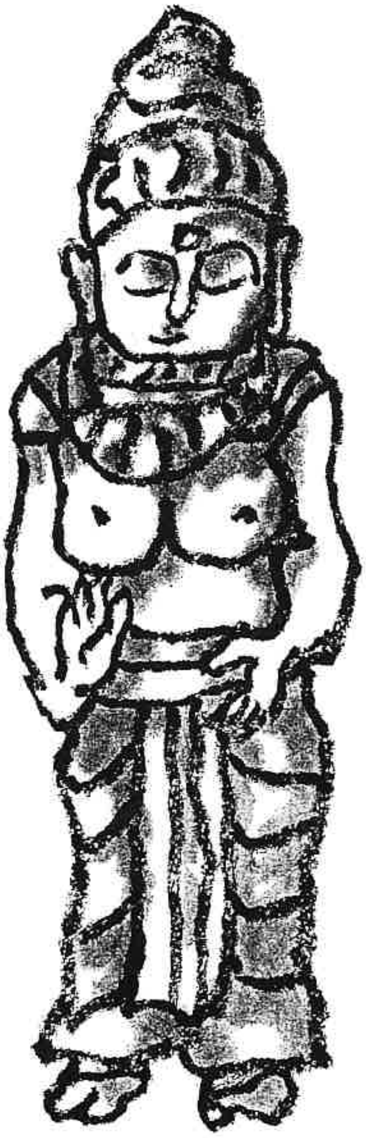
信、情報網及び教育全般にわたり深刻な問題を抱えております。

先ずモンゴルの最大の産業は牧畜産業ですが、その形態が根本的に変わった事が原因とされております。統制経済の下では協同組合で羊、ラクダ、牛、馬等別々に分担して管理していたのが、自由化になり個人に分配されてからは飼育の方法も異なるこれ等の家畜を一緒に飼わざるをえない様になりました。その結果飼育人不足が生じており、その皺寄せが子供にかかり二〇パーセントもの子供が学校に行けなくなっていると聞きます。それというのも今迄の無料教育が無くなり教育に金がかかる様になった為もあります。家畜の私有化が為されてもそれを売買し運搬する流通機構が悪くなり、結局家畜がいても現金化する方法が無くなっているからです。品不足やインフレで高騰している日常必需品を購入し、税金を支払うのが精一杯で子供の教育費に迄は手が回らないのが現状の様です。その上教育してもインフラが崩壊している現状では就職も覚束ないと聞いては子供を学校に行かせたくない遊牧民がいても不思議ではありません。

共産主義時代はラジオや新聞が遊牧民の間に浸透しておりました。遊牧生活様式にも拘らずほぼ一〇〇パーセントの識字率を誇っておりました。それが情報網の衰退により日常生活にもかなりの悪影響を及ぼしております。我々はパオで馬乳を御馳走になった御礼にラジオの電池を置いてきましたが、後で電池不足でラジオも聞けないと聞き一役立てばと思いました。

燃料不足の他に原料不足が国内生産の減少を招いております。羊毛や牛皮は主に輸出に廻され国内生産用の化工原料が不足するという悪循環を生んでおります。

カラコルムは十三世紀のモンゴル大帝国の古都で今は遺跡らしい物は何もなく、ただ大平原



の広さが昔を偲ばせるだけでした。ジンギスカンの埋葬の地は科学調査で推定されているそうです。人工衛星からの空中写真と地質調査によると昔広大な土地を掘り起し色々な物を埋葬した形跡があります。但しモンゴル政府は発掘を禁止しております。その近くにある一五八六年に建ったモンゴル最古のエルデンズー僧院は圧巻でした。四方高い壁に囲まれた大きな敷地です。しかしその大部分は過去七十年余年の共産化の過程に於て破壊され、今はその一部しか残っておりません。敷地の一番奥に今でも使っている僧堂と、今は影も形も無い本堂を取り巻くいくつかの寺院が残っているだけです。ただそれ等のひとつひとつが建築的にも美術的にも色彩豊かですばらしくモンゴルの青空を背景にくっきりと浮かび上がっている姿を見た時、やはり苦労してもここ迄来た価値があったと思いました。

カラコルムに行く途中迷ったお蔭で予定していなかったラマ教の寺院を拝観する事ができました。その僧院も壁に囲まれ、その一角に大きくもない釈迦堂があります。その内側は礼拝者が歩けるだけの通路が四面にあり、建物のほとんどの部分がラマ僧の座る場所で何人もの老若の僧侶が中でお経を唱えていました。その回りをお布施を置きながら参拝して廻ります。部屋は薄暗くお勤めの時以外は全体が締ります。エルデンズーのような豪華さはありませんが、地元の遊牧民の集落に密着し毎日使われている素朴な雰囲気でした。

ラマ教

モンゴルにはモンゴル人の他にロシア人、中国人、カザック人等の少数民族がおり、仏教の他にもイスラム教やシャーマン教があります。モンゴルに仏教が伝来する以前は自然宗教とし

てモンゴル民族は青空を崇拝し、呪い師や祈禱師を通じて無数の精霊を祭り、先祖崇拝の習慣もありました。モンゴルの最大の宗教であるラマ教は政治と切り離せない密接な関係にあります。中央アジアに位置し、ロシアと中国と国境を接しているモンゴルは国の独立維持にいつも主力を置いていました。ジンギスカンの下でモンゴルは十三世紀には黄河から黒海まで一大帝国を築き、それが百五十年余り続いた事は良く知られていますが、その後内乱や外圧に屈し、一九六一年に満洲の清朝に征服され、一九一一年迄自治を失っておりました。一九一一年に外蒙古だけが独立しましたが、又八年後には中国に屈しやっと一九二一年にロシアの手助けで独立を勝ち取りました。しかし一九二四年にはそのロシアをも追い出し完全な独立国になりました。こういう状況もあってラマ教は政治の一助として導入されました。

仏教の伝来は日本よりも遥かに遅く、一五七八年にモンゴルの将軍アルタンカンがチベットの黄派の高僧をモンゴルに招いた時に始まります。その動機はジンギスカンのようにモンゴルを再統一し、清朝のような外敵から守る為、仏教を利用しようとした事です。意図的に中国のような大乗仏教でなくラマ教を選んだのもその為です。アルタンカンは自己の権力を仏教に正当化してもらい、その代り仏教を手厚く保護しました。ダライラマの称号はアルタンカンが最初のチベットからの高僧に与えた時に始まり、それ以後も後継者がその称号を受け継いできております。

ラマ教は十七世紀に入りモンゴル全土に広がり貴族と一般大衆に支えられ、ラマ教の僧院は遊牧民の集まる所には至る所に建てられました。モンゴルのラマ教は原始宗教の儀式や機能を受け継ぎ、更にマハヤナ派の要素とヒンズー教の

一種で密呪、密教的要素も兼ね備えております。つまり魂の救済と厄払いの為の儀式と仏教本来の悟りと生れ代りをその教えの中心としております。特に黄派は僧院に入り、仏典の理論と形式を重んじます。黄派は僧院に入り、仏典の理論と形式を重んじます。僧侶はモンゴル社会で重要な政治的役割を果していました。

黄派の説によれば為政者は仏の道を悟った僧の変身であり、宗教と国家の相互依存を強調しました。二十世紀に入り五八三の僧院が建ち国の富の二〇パーセントを支配しました。都市は僧院のある集落にでき、ウランバートルはダライラマの次に位の高いボグドカンという位の高僧の住む所として発達しました。僧院は富と信者を増やしたモンゴル貴族の衰退と反比例して権力を増やしました。一九一一年に清の支配が終った時は僧院が唯一の統治機構を為し、一九二〇年代には全人口の三分の一が僧院僧侶の管轄下にありました。

共産主義と人民革命党の擡頭により一九二一年以降は仏教は弾圧の対象となり僧院は閉鎖され、僧侶は要職を解雇され、僧院の財産は没収されました。特に一九三八年ソ連はモンゴル仏教徒が日本軍と共謀して傀儡政権を建てようとしいると信じ、僧院の破壊と僧侶の追放に没頭しました。しかしその反面近代化と社会改革が共産党の下で押し進められました。

一九七〇年代の初めから人民革命党はもはや僧院は政府に対抗する力を持たないと見て、又モンゴルの文化や伝統、それにアイデンティティーを培う手段としてラマ教の復興を手がけ始めました。ウランバートルのガンダン寺だけが開放され現在一〇〇人位の僧侶が住んでいます。老僧は薬草等の伝統医学に関するチベット語の翻訳に携わされました。他に二・三の僧院が博物館として観光客に開放されています。

仏教の復興

仏教の復興は一九九〇年の民主化運動以後も着実に進んでいます。それ以前でも一九七九年と八二年にはダライラマも訪問しました。更にウランバートルでアジア平和仏教会議が開かれ、日本、ベトナム、カンボヂャ、スリランカ、ブータンが参加しました。仏教は主に年寄の中に生き延び、年々若い僧侶の姿も増えております。人々の言葉の中にも仏教のことばや格言が多く使われ家の祭壇には仏像の絵が飾ってあります。

ガンダン寺の一角にある修道寺には元ソ連邦から来ているという留学僧もいれば、地元の幼い子供が黄色の袈裟を着て親に連れられて勉強に来ている微笑ましい姿もありました。

たまたまそこで出会った女性は近くの女性だけの仏教学校をパオで開いている人で、この人の道案内でこのパオに入り十人位の女性の集会を参観しました。その日はアメリカから来たという若いお坊さんの話を聞く為に集ったそうで、その方の話では海外のラマ僧が説法や教えに来る事があるそうです。ところでこの学校は家庭暴力の犠牲者の女性の駆け込み寺になっており、モンゴル社会で僧院が社会問題の受け皿になりつつあると感じました。特に共産主義時代以前の僧権政治の時代は外国人から見てモンゴルの僧侶は無知無力で退廃しているというのが一般的見解でしたが、一般のモンゴル人にとって僧侶は人間性の弱さを持っていても制度としての僧院の不変化を信じていました。従って今日昔の仏教の様に形式化せず、政争に巻き込まれず、一般庶民から遊離せず、仏教本来の信者を中心とした姿に戻る絶好の機会だと感じました。

「伊藤三喜庵の世界」展

銀座・和光ホールで

善光寺の役員であり、建築家でありながら、現代の感性で独自の画境を開く画家として注目されている伊藤三喜庵氏が三回目の個展「伊藤三喜庵の世界―伝統に現代の感性を込めて―」を十二月二十四日から三十日まで和光ホールで開催。日本の仏像を描いた水墨画五十余点に加えて、読売新聞に連載された津本陽氏の小説「椿と花水木」の挿絵原画を展示しました。

伊藤氏は今年八十歳。絵画は油絵から手がけ、十六歳から出展。日本大学工学部建築学科を卒業し、伊藤喜三郎建築研究所を設立して建築家として活躍。四十七歳で水墨画に転じ、日本南画院展に出品。また日本自由画壇に参画し、同院の「南画院賞」「文部大臣賞」を受賞。文芸春秋社などの出版物の挿絵も多く手がけています。

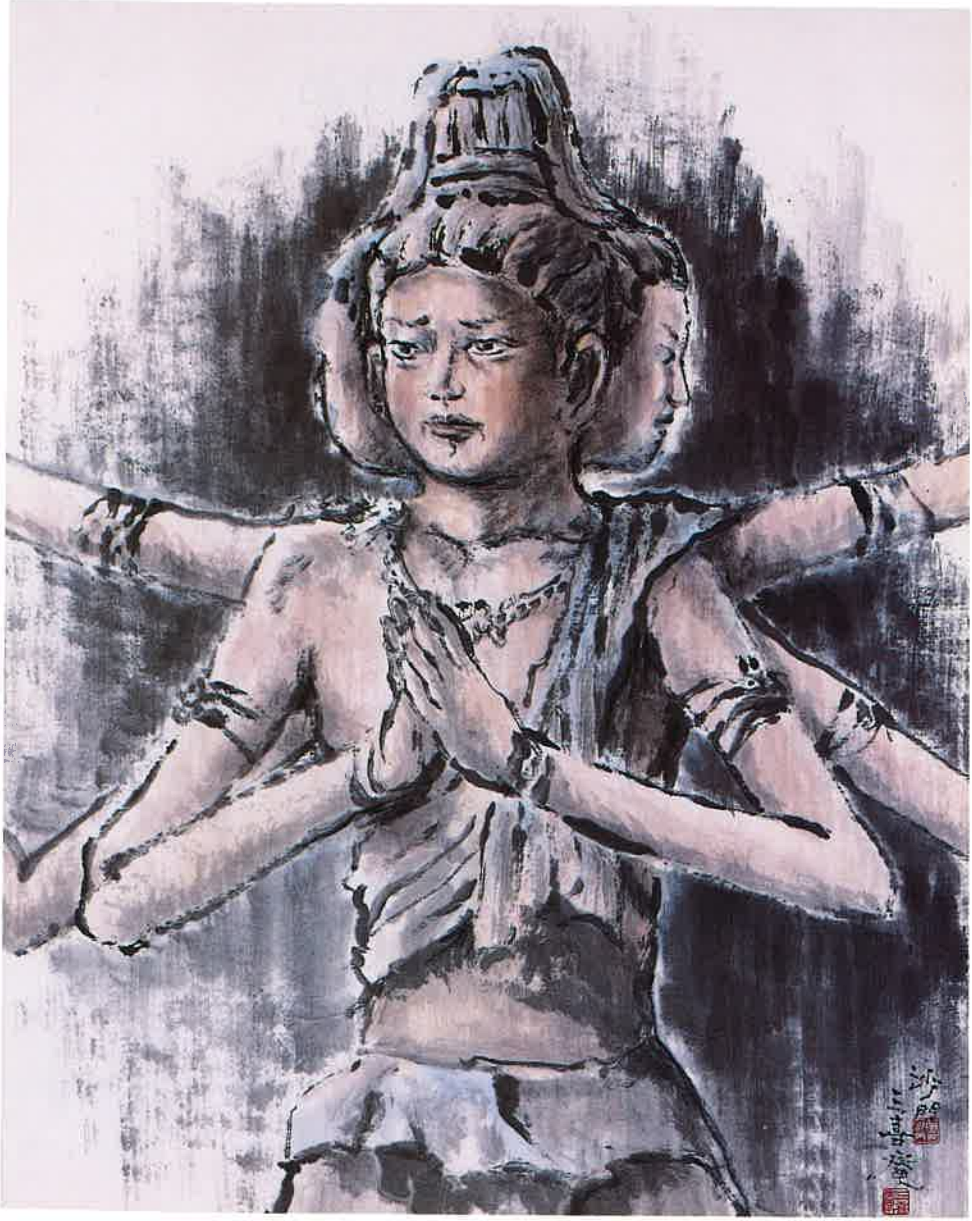
個展は、これまでに一九八九年と九一年の二回、いずれも和光ホールで開催。「その中に哲学や美学を見いだす」と仏像を描くことも多く、今回は仏画を中心に出展。伊藤氏は現在、日本自由画壇理事長、日本南画院常務理事、社団法人東京都建築事務所協会名誉会長を務めておられます。

尚、四月二十六日より一週間、横浜のトーヨコギャラリーにて「ジョン万治郎の生涯」挿し絵個展を開催します。

伊藤三喜庵の世界

善光寺収蔵作品

中国のスケッチ



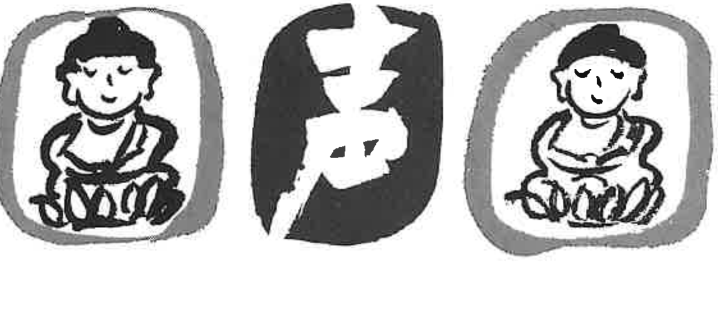
阿 修 羅

釈迦三尊仏

『絵本 ジョン万治郎の生涯』

伊藤三喜庵 画・解説

（株式会社求龍堂 刊）



ゴボウの成育に見る人生

茨城県　山口哲雄

　家の前のゴボウの葉が枯れて虫喰いも多く近く朽ち葉になる。盛りの時には背丈が高く車の出し入れにも見通しを悪くしていた。

　葉に老いが覆うと本来の地中のゴボウは採り頃となる。人生もこれと同じで、成長期には太陽の光を満喫するため勢よく葉をひろげ精一杯背のびをする。その時にはまだゴボウは未成熟で食べられない。葉が光を吸う必要の失せるにつれゴボウはその使命である完結に向っていて、ついに抜きとられる日を待つのである。太古からこの繰り返しである。有難い。

兄の五十回忌と母の十三回忌

横浜市　野本武子

　去る十月十六日、母、兄の法事を執り行い頂きまして洵に有難う存じました。厚く御礼申し上げます。お陰様で肩の荷がおりた思いで居ります。

　早いものでございます。母の死よりもう十三回忌となりました。戦死しました兄のこ

とを母は非常に悲しんで居りましたので、はからずも兄の五十回忌、母の十三回忌と重なりましたのも、母の想いがあったのではないかと思って居ります。亡兄のことは、弟妹達はあまり記憶に無いと申して居りますが、私には、一番大好きな兄でございました。フィリピンで学徒兵のままどんなにか無念の思いで死んでいったことと思いますと、私で出来るだけの供養をしてあげたかったのでございます。

さる八月末、フィリピンに妹と慰霊の旅に参加しました。旅行業者の建立した小さなお寺「比島寺」ですが、お盆供養をして参りました。三名の僧侶の方々が日本より参加して下さいました。年配の方は浜松のお寺のご住職で比島よりの生還者。若い僧侶の方が娘婿とのことで父上の病気を心配されて付き添ってこられました。もうお一人はレイテで父君（住職）が戦死されたということでございました。夜分ホテルのかたわらのバクサンハンの川で僧侶の読経の中で灯籠流しを行い、兄の冥福を祈りました。頂いた塔婆は比島寺に納めて参りました。有り難う存じました。

日本での供養も無事終り、とても嬉しく存じております。

末筆になりましたが善光寺様の益々のご繁栄と方丈様を始めご一家皆様のご健康をお祈りして、御礼の御挨拶申し上げます。

心身いたわりながら「アメニモメゲズ」に

八王子市　糠信義男

開創二十五周年、留学僧育英会設立十周年まことにおめでとうございます。度々ご本を送って頂きありがたく愛読させていただいております。私どもの息子も昨春東京工大の大学院を卒業しキャノン㈱にお陰様で就職致し、一安心

の矢先の事でございました。

息子と二人して善光寺様にお参りさせていただいたころよりすこしずつ貧血が出ていたように思います。四、五年間自覚症状もなくすごし、会社の健康診断で、検査を要すると出されてしまいました。町内の行きつけの主治医に相談したところ、「それでは一度検査をしましょう」と医療センターを紹介して頂き、その結果「骨髄異形成症候群」との診断が下りました。生活に一つきりがついて今まで以上町内、寺、等にご奉仕できると思っていましたので、大ショックを受けました。七月十三日に入院しましたが、入院前に、菩提寺のお施餓鬼の本堂清掃、仕度、当日のお手伝いをさせていただきました。

先日、昼間光威先生が見舞いに来て下さり、私の枕もとに『日課経要集』がおいてあるのを見て、『正法眼蔵』や『修証義』の聖典など色々郵送して下さいました。毎日ベットの上で勉強させて頂いております。

私の病気は見た目には元気そうですが、血液を作る髄が悪いので薬もないようです。早いもので入院以来三ケ月になりました。一時は落込んでいましたが、今は大丈夫です。病気と仲良く付き合って行きます。

○

世尊様よりはげましの言葉、そして見舞いまで頂き、ありがたく只々合掌低頭し落ちる物を止めることができません。入院以来、真夏の暑さもさほど感じることなく過し、病院の窓よりふと外を見ると、いつの間にか赤トンボが舞う季節になったのに気がつきました。早いものです。あと一ケ月ほどで退院し、通院となる見込です。家に戻りましたら今迄はがむしゃらに働きましたが、今後は一日一日を心身自からいたわり「アメニモメ

ゲズ」の心で菩提寺、町内会等々のお手伝いをさせていただくつもりです。

お忙しきおりの手紙、見舞、本当にありがとうございました。

ネパールの学校のこと
カトマンズにて

野田忠行

突然の手紙でびっくりなさった事と思います。私は川尻様と二度善光寺へ伺ったことがあり、今回川尻様と京都の清水様（尼僧）と一緒にインドに来て、七月二十二日朝九時にダライ・ラマと面会が出来ました。成田〜十時間〜デリー〜十四時間〜ダルマサーラ〜九時間〜マナリー〜九時間〜ジスパーと飛行機とバスを乗り継いで来た甲斐がありました。帰りは二十三日早朝ジスパーを出発しマナリー〜デリーを経由して、二十四日正午にアジャンタ・ホテルで解散の昼食会をしました。

ところで私は、ネパールのカトマンズに学校を持っており、十四人の生徒が来ております。インド旅行の帰路七月二十七日に訪問し、ささやかなパーティーをしました。写真はその際のものです。彼等は貧しく学校へ行けない子供達です。二十八日に男の子にはジーパンと上着、女の子にはブラウスとスカートを寄付しました。この買物をしてくれたのは友人の奥様です。二十九日の授業には子供達は皆

新調の服を着ていました。

今のところ一部屋しか借りていませんが、近々もう一部屋借りて、もっと多数の生徒を収容したいと考えております。土地、建物も安いので、小学校（六年制）の設立もカトマンズの友人達と話し合いをスタートしました。子供達に勉強のチャンスを与えたいと思っています。

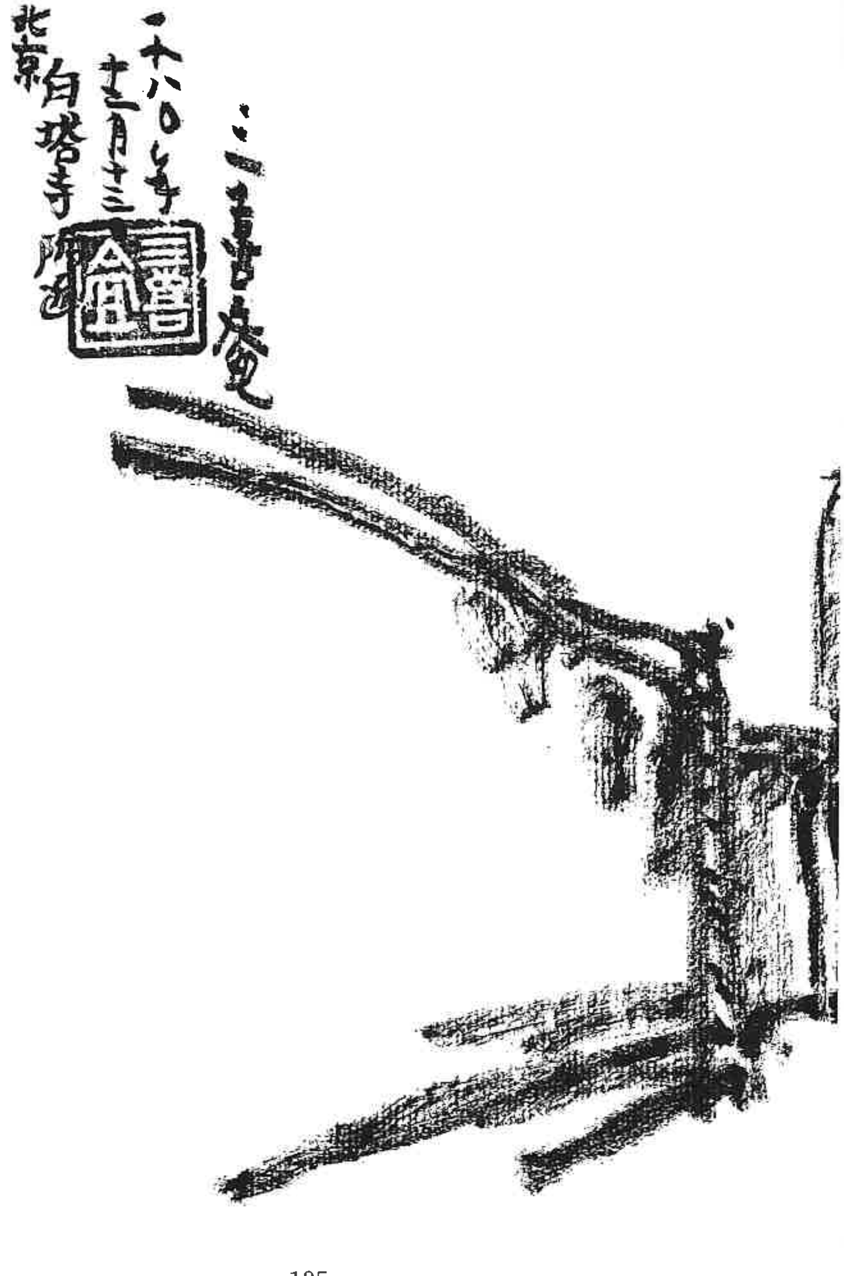
一回しかない人生
残り余生を有効に

横浜市　牧野貞夫

人生、思惑通りにコトは展開してくれません。十二月に退職して、などと考えておりましたが、年回りのせいでしょうか、小生にとりましては大きな仕事に取り組むことになりました。早く軌道に乗せ、後輩にバトンタッチしたいと考える今日この頃でございます。

先日丸善で『正法眼蔵』の全英訳を見つけ、びっくりし、早速買って帰りました。その折りKURODA INSTITUTEのDOGEN STUDIESも見つけ入手することができました。正法眼蔵が小生の手に負えるものでないことはもとより承知しておりますが、少しずつでもと考えております。

一回しかない人生、残り余白もそうたくさんあるようにも思えず、少々焦りの気持ちもあります。しかし一日一日、がんばる所存でございます。


三善庵
一九八〇年十二月十三
北京白塔寺

『中外日報』紙上に輝く『成寿』

「善光寺開創二十五周年」と「留学僧育英会創立十周年」を特集した『成寿』二十三巻秋季号は、皆様から大変ご好評をいただきました。九月八日付の『中外日報』紙に内容が詳細に掲載されましたので本誌で皆様にご紹介いたします。

聖徳太子像を奉安

横浜・善光寺（黒田武志住職）の機関誌『成寿』第二十三巻・秋号が刊行された。同寺開創二十五周年と善光寺留学僧育英会設立十周年の記念特集号で、三月と五月に挙行されたそれぞれの記念祝典の模様が写真と記事で克明に報告されている。巻頭のカラーグラビアを大本山總持寺の諸堂伽藍で飾り、特別読み物として駒沢女子大学の東隆眞教授・副学長（横浜善光寺留学僧育英会理事）による「聖徳太子讃仰―善光寺　聖徳太子像奉安にちなんで―」などを収載。その他、各方面からの声や便りが満載されている。『成寿』は毎号、国内外の寺院や関係機関等に三千五百部以上が配布されている。紙面はA五判で百六十ページを越える圧巻。

善光寺が創立二十五周年の記念報恩行の一つとして、錦戸新観仏師謹刻の聖徳太子像を奉安した意義について、東隆眞教授は「『宗祖（曹洞宗でいえば高祖道元禅師と太祖瑩山禅師の両祖）を通して釈尊にかえる』を誓願とする黒田住職にとって、聖徳太子をお迎えすることは、仏教の歴史的原点、宗教的発祥である釈尊に直結する道元禅師、瑩山禅師の教えを学び、実践する善光寺のゆくてに新しい大きな光をお迎えするにふさわしいものとな

ろう。同時に、はからずも善光寺は聖徳太子をおまつりする曹洞宗寺院の先駆的な役割をになうことになった」と讃え、「日本の伝統仏教がこぞって尊崇し、道元禅師、瑩山禅師また称揚してやまぬ聖徳太子の存在について、曹洞宗の私どもは認識をあらためなければならない」と力説している。

「道元禅師は袈裟を被着する聖徳太子を讃美し、瑩山禅師は仏舎利をにぎって生まれたという聖徳太子を讃嘆した」ことが正法眼蔵や伝光録に記されている。奉安された太子坐像は、楠材の一木造り。極彩色で、総丈百二十センチ、身長六十センチ。「奈良・法隆寺に秘蔵する国宝、摂政太子像に通ずる親しみ深い御姿である」という。

前角老師にハリス記念賞

ニューヨーク市立大学の創立者であるタウンゼント・ハリスを記念する「ハリス創立記念賞」の今年度（平成六年度）の該当者に、ロサンゼルス禅センターの前角博雄主監（黒田方丈の実兄）とその僧伽が選ばれ、十月五日にニューヨークの同大学でシンポジウムと受賞式が開催されました。この賞は日米関係の未来像やリーダーシップにおいて、その進展に貢献した個人またはグループに毎年一回、贈られています。前角老師の僧伽は、ホームレスの子供やエイズ患者の救済活動などの社会活動も行っています。同大学日本委員会理事長のジェームス・J・シールズ氏は「本学と日本仏教との歴史的交流の立場から、我々は一九九四年度の受賞者は、アメリカの白梅

善光寺ニュース

会の前角博雄師とその同僚以外にないと考えた」と選定の理由を述べています。受賞式には前角老師、その門下のバーナード徹玄グラスマン、ジョン大道ローリーの両師も出席。受賞式に先だって「アメリカの禅」のテーマでシンポジウムが行われました。

ハリスは幕末に初の日本総領事に任命され、一八五六年、伊豆下田の曹洞宗玉泉寺にアメリカ領事館を置き、日米和親条約の改定を行なった外交官として歴史に名を残す。ちなみに玉泉寺の村上庸道住職は最近、下田の人々から集めた浄財により、ニューヨークにあるハリス氏の墓を新装したということです。

韓国へ答礼の旅

横浜善光寺留学僧育英会の黒田武志理事長、佐藤俊明常務理事（千葉県柏市・龍光寺住職）、東隆眞理事（駒沢女子大学副学長・教授）の三人と、（財）松ヶ岡文庫長の古田紹欽博士は十月二十五日、韓国慶尚南道にある仏宝宗刹、霊鷲山通度寺に拝登しました。今回の訪韓目的は二つで、一つは通度寺の老天月下方丈が三月に来日し、善光寺留学僧育英会の設立十周年記念式典に臨席されたので、これに対する答礼。もう一つは、老天月下方丈が大韓仏教曹溪宗の第九代宗正（管長）に就任したことに祝意を表すためです。古田博士は日本仏教学界の代表として訪れました。案内役は善光寺育英会の元育英生で通度寺僧侶の李焌秀和尚（早稲田大学大学院生）と、通度寺聖宝博物館長の釈梵河和尚がつとめてくださいました。詳細は本文をご参照下さい。

黒田住職が総和会・獄山会北信越管区大会の準備委員会で基調講演

「今、二十一世紀へおもいやりの心を新たにし、信頼される教団づくりを」を大会スローガンに平成七年六月七日に開催を予定している曹洞宗総和会・獄山会北信越管区大会の準備委員会（大会長は長野県伊那市・常円寺住職角田宗道老師）が昨年十一月二十五日、大会会場となる上諏訪温泉の「浜の湯」で開かれ、自坊の開創十五周年を記念して海外留学僧派遣育英会を設立し、この十年の間に六十人に及ぶ留学僧を国内外から採用してきた善光寺・黒田武志住職が基調講演の講師に招かれました。

「善光寺留学僧育英会」の理事長である黒田住職は「法燈は海を越えて」と題して一時間半にわたり熱弁をふるい、ゼロから出発して「無一物中無尽蔵」を実践してきた自らの捨て身の体験を語り、九十人を越える参会者の感動と共感を呼びました。

成願寺「小笹会」発足
黒田方丈が相談役主席に

東京都中野区の成願寺（小林貢人住職）が「成願寺学術研究振興基金〈小笹会〉」を設立し、善光寺黒田武志方丈が相談役主席として役員の一人に任ぜられることになりました。

〈小笹会〉は仏教ならびにアジア・アフリカ地誌を中心とする学術研究振興助成と、勉学の志に燃える学徒の生活相談という二大目的をもっています。対象は仏教徒のみならず、広く内外に門戸を解放し、学術の研鑽にいそしむ前途有為の逸材を発掘し、研究助成、生活援助を通じて心おきなく勉学に精進できる道への潤滑油となるよう設定されるものです。

横浜善光寺留学生育英会は「仏教を修学する者」という規定があり、海外に派遣、海外から日本に受け入れるという点が小笹会とは異なっています。

平成七年度の募集が始まります。お問い合わせは郵便で。

〒164　東京都中野区本町二ノ二六ノ六
　宗教法人成願寺　小笹会　まで。

特別養護老人ホームで黒田方丈が講話

三月十日(金)、黒田方丈は横須賀市の特別養護老人ホーム・横須賀愛光園(聖隷福祉事業団、施設長・福山恭之氏)に招かれ、〃生きるよろこび〃と題して約一時間講話をしました。ここでは平均年齢七十六歳という男女五〇名(定員一杯)が入居しており、中には寮母さんのお世話なしには生活できない人もいます。

善光寺ニュース

黒田方丈は六波羅蜜をやさしく説いた〈六つの願い〉の、

あたえよう、物でも心でも（布施）
生きよう、人間らしく（持戒）
耐えよう、どんなことにも（忍辱）
努めよう、自分の仕事に（精進）
おちつこう、息ととのえて（禅定）
目ざめよう、仏の道に（智慧）

と、日々のくらしの中で大切にしていきたい五つの心〈日常の五心〉の、

一、すみませんという反省の心
一、はいという素直な心
一、おかげさまという謙譲の心
一、私がしますという奉仕の心
一、ありがとうという感謝の心

二枚のちらし（善光寺発行）をもとに語りかけ、お年寄りにも生きるよろこびを持ってほしいと一語一語に誠意をこめました。

後日、施設長の福山恭之氏から、次のようなお礼状をいただきました。

先日は「生きるよろこび」と題して、第一回の文化講演会のご講演誠にありがとうございました。

日々生かされていることに感謝し、今日一日を精一杯生きるというご主旨であった様に思います。講演後も余韻が残り、お年寄達は、ご住職から頂いた彼岸に到る等の本を熱心に目を通しておられました。又、この様なお話しを是非続けてほしいとの声もあがっております。

この講演会は私共の施設の基本方針である、お年寄の幸せ追求への一つである「苦しみなく、大往生して死にたい」への精神的援助(心のケア)としての一環として組み込まれたものであります。又、継続して行っ

善光寺ニュース

施設長・福田恭之氏と黒田方丈

ていきたいと思っております。ほんとうにありがとうございます。感謝、感謝であります。又、機会を作り、ご住職には是非もう一度、ご講演をお願いしたいと思います。お会いできることを楽しみにしております。

育英会の発展に夢と期待

静岡県庵原郡
鏡島元隆先生

開創二十五周年、育英会十周年の記念すべき年を迎え、おめでとうございます。光陰の過ぐるの速いのを更めて痛感いたしますとともに、育英会が着々と充実発展しつつあるに驚嘆致します。後十年経ったらどうなるでしょうか。大きな夢と期待を抱いております。それには何より健康第一で、御自愛御長養祈り上げます。

留学僧教育に深く感銘

鎌倉市
古田紹欽先生

『成寿』秋季号を頂き、留学僧教育に尽くされました育英会十周年、その成果を改めて知り、深く感銘いたしました。本誌を熟読いたしまして、設立になりました育英会の歴史を伺うにつけ、御苦心の並大抵のことでなかったことを拝察いたします。法縁を蒙りまして韓国に参りますことが出来ますことをこの上一層有り難く存じます。

聖徳太子御尊像
有難く

愛知県名古屋市
前田惠學先生

開創二十五周年、本当にお芽出度く存じました。愛知学院から参加の人たちからも少しづつ伺っていましたが、本号でその式典の詳細を拝見して心からお慶び申し上げます。

聖徳太子御尊像をお迎え下さいましたこと、また有り難く存ぜられます。お写真を拝してそのお姿に打たれました。

先ずは益々の御発展を念じ上げます。

日本佛教の生き方
問いかけ

東京都葛飾区
林　博明先生

先般は、すばらしい『成寿』秋季号第二十三巻を御恵贈賜り有難うございました。

特集開創二十五周年記念祝典「法燈の国際化」に日本佛教の生き方について述べられている。大圓方丈の海外佛教視察研修経験を通じて痛感されたこと。道元禅師の「正伝の佛法」の真の意味は何か。二十一世紀に向けてみずから問いかけ、国際社会に展望されたことは、頭の下がる思いです。特に日本佛教は、社会的実践が欠けることに気がつかれ、使命と責任を果したい一心の情熱この一言に尽きると思う。

どうかお身体にご自愛して下さること、大圓方丈の益々ご御活躍をされ更に、善光寺様の法輪が転ずることを亀有から祈念申し上げます。

黒田老師の考えに
日頃より共感

横浜市
石原孝哉先生

『成寿』いつも楽しく拝読いたしております。今回は特に「特集・留学僧育英会設立

十周年」を興味深く読ませていただきました。

「世界最大の佛教国日本の役割」や「正法の佛法」に対する黒田老師の考えには日頃より共感を抱いておりましたが、今回、育英会十年の歩みを詳しく知り、またここから幾多の人材が育っていることを知って心より喜んでいる一人です。

どうかこの素晴らしいお仕事を末長くお続け下さいますようお祈り致します。

高邁な理想と実績に改めて敬意

長野県長野市　市川千晃様

「成寿」秋季号を御恵贈下され恐縮に存じます。たいへん素晴らしい内容に感服するとともに、興味深く拝見させていただきました。

今年は貴山開創二十五周年、育英会設立十周年に当たり、その記念式典も盛大に執り行われたご様子で、誠にご同慶に存じ上げます。特に、留学僧の育英事業を通して人材の育成と佛教の国際化を図るという高邁な理想とこれまでの実績に、改めて敬意を捧げる次第でございます。更なるご発展をお祈り申し上げます。

聖徳太子信仰を再確認

東京都世田谷区　榑林津龍様

「成寿」秋季号御送附いただき有り難うございました。毎号立派なお写真を拝見いたし驚いております。此の度は特に開創二十五周年、育英会十周年とおめでたい特集で有り難く拝読させていただきました。殊に聖徳太子像の奉安については東先生の「奉安にちなんで」にて太子の色々を

知ることが出来まして、太子信仰を再確認いたしました。有り難うございました。

貴い利他行

大阪市東淀川区
西岡祖秀老師

先日ぶしつけにも電話にてお願い申し上げましたところ早速に『成寿』秋季号の御恵送にあづかりまして、誠にありがとうございました。お陰様で東先生の「聖徳太子讃仰」を御拝読させていただくことができ、喜んでおります。又、小生、全くの不見識にて善光寺様の御開創二十五周年、並びに育英会設立十周年のことも御誌にて初めて存じ上げた次第であります。

誠に貴い利他行と存じ今後、益々御発展されますことを心より念じ上げております。

人間としての生き方、その根本に宗教が

岐阜県美濃加茂市
山本浄月尼師

「成寿」第二十三巻秋季号御恵送賜わりまして誠にありがとうございました。

昨今の世界的大きな変動の渦の中、政治、経済と共に人間としての生き方、その根本に宗教が精神を支えるものとして今ほど必要な時期ではないでしょうか。世紀末の混沌の中、二十一世紀に向ってすべての人々にかかわる問題として新しい価値観とヴィジョンを確立する時期と思われます。佛教徒の大いなる連帯によって正しい方向づけができたらと祈ります。善光寺様の御努力もその一つと思って居ります。

菩薩行の結晶に合掌

横浜市
鹿野融照老師

成寿第二十三巻を御恵贈いただきましてありがとうござ

いました。只々圧倒されるばかりの想いで一頁々々を拝読させていただいて居りまして、老師さまをはじめ、奥さまをはじめとするご山内み弟子さま方の佛道求真の菩薩行の結晶に合掌するばかりです。

文字通り不立文字の中で佛法実践の教宣を邁進されていらっしゃること。遠く及ばない私共の理想を示されていらっしゃるお姿に接する法縁に恵まれましたことを心から感謝いたして居ります。今後ともご指導を得たく何卒よろしく願い上げます。

丁寧な誌面作りで いろいろ啓発され…

東京都世田谷区
池田魯参先生

毎号美しい成寿誌を御恵贈賜わり恐縮です。毎号丁寧な誌面作りでいろいろ啓発されています。私もアメリカ合衆国東部のヴァージニア州に二年間住んでみて、アメリカの若い人たちが佛教に関心を持っていることに驚かされました。しかし、そういう人たちが佛教の勉強を持続させるには種々の困難が伴うことも確かで、就職先やら何やらで苦労するようです。佛教に関心を持ち、まじめに勉強したいと考えている学究者たちに、国籍を問わず後援されておられる貴寺の功業にはただただ頭が下がる思いで一杯です。

再認識した 方丈さまの夢

横浜市
赤間義徳様

成寿（二十三巻）の隣に創刊号を並べてみました。創刊号は六十四頁、二十三巻は百六十四頁。カラーは何倍にもふえて、善光寺の発展がひと目で分ります。

さて宇宙飛行士・向井千秋さんは「宇宙から地球を見る」

夢を十年かけて実現しました。これは方丈さまの夢即ち「地球と宇宙に佛法をみなぎらせよう」という壮大な大誓願と密接にかかわっております。向井さんの夢を実現させたのは〝科学〟であり、その根底に（あらゆる生命を平等に大切にする）〝佛法〟の支えなければ地球の未来がないからです。たとえば宇宙飛行の科学技術は軍事に利用され、地球は汚染され破壊されます。脳死、臓器移植等の問題も含め、〝佛法〟が土台にない科学は危険な道を歩みます。方丈さまの夢は地球と人類に深くかかわっていることを再認識した次第です。

遊び場だった總持寺少年期がなつかしく

東京都港区
山口　修先生

成寿最新号ありがたく拝受しました。巻頭の總持寺、実は小生少年期を總持寺の近辺で過ごし申訳なきことながらその境内を遊びの場としておりましたので、とくになつかしく感ずるものがありました。ご心配頂きました身体のほうも目下順調に回復し執筆や講演も従前どおりにつとめております。み佛のご加護と申すほかはございません。

眩いばかりの記念の記事

千葉県東葛飾郡
椎名宏雄老師

「成寿」誌第二十三巻御恵送賜り有難く御礼申上げます。

御開創二十五周年、並びに育英会設立十周年、各記念の諸記事、誠に眩いばかりのすばらしさに感一入であり、この偉大な足跡の原動力は貴師の御健康と燃ゆるが如き道念の賜と確信致します。更に新たな飛躍を一層の御健勝と共に心からお念じ申上げます。

盛りたくさんの内容

埼玉県行田市
福島伸悦様

「成寿」秋季号お送り下さり、誠に有難度うございました。いつもながら盛りたくさんの内容、そして黒田御老師様の優れた創造力、逞しき意志、もゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心を感じとらせて戴いております。

末筆ではございますが、善光寺様並びに留学僧育英会の更なるご発展をご祈念申し上げます。

美しい写真　居ながらに参拝

東京都港区
真野龍海先生

「成寿」二十三号を拝見しますと、御当山二十五周年記念との事、その御聖業の発展と御教化の充実に心から敬意を表し、御祝い申し上げます。いつも美しい写真で、居ながら、参拝させてもらっているようです。息女も鶴見大学でお世話になったのですが、まだ参上したことがなく、御本山の姿を誌上でゆっくり見せてもらいました。

「成寿」で盛大な式典に参加

横浜市
石井修道先生

先日、善光寺様をおたずねいたしました時は、ちょうど開創二十五周年記念式典のご準備の最もお忙しい日でしたが、「成寿」でその盛大な式典の様子があたかも参加できたような記事や写真に接し、あらためてお祝い申し上げます。その折、方丈様のお言葉でいまだに耳に残っているものは「人を育てることは最も困難なこと」です。今後、国際的に人を育てられている方丈様

の御活躍を祈念申し上げます。

日一日を大切に

横浜市　奥家美智子様

平素は大変にお明燈をいただき深く感謝致しております。一檀家の一人として明日に向って頑張ろうと思う生を与え力を蘇させていただき、出来るだけ法会には寄らせていただきたく願っております。良い事がなく常にこれは生きてるあかし、日一日を大切にと念じて虚心坦懐ですごしたいと思います。

します。

宗教は生涯学習

静岡県田方郡　岩谷朝吉様

美しい写真、輝く文章に今回も心を打たれました。宗教は今日盛んに言われている生涯学習であることを痛感しております。私どもの方で、地域の生涯学習をどうするのが良いかと考えております。日本人には素地が出来てないようで、他人の力を借りようとするようです。勉強致します。

善光寺様の偉業に心ひかれ

横浜市　田沢洋子様

この度は、成寿二十三巻をお送り下さいまして本当に有難うございました。思わず読み耽りましたのは〝法燈は海を…〟と共に善光寺様の偉業に心ひかれたからと存じます。私ごときにもこのようなお心遣いなさって居られることに心打たれまして感謝いたしております。前ぶれも無く訪れましてこうしたご縁をいただき嬉しいばかりでございます。生きる喜びを見出した気が致

たくさんのお便り、ありがとうございました。

★善光寺開創二十五周年の盛典と共に留学僧育英会設立十周年式典無事円成せられ、詳細な記録を掲載致されましたこと洵に有難く存じます。倦むことなく教化と育英のこと只々敬服の至りに存じます。

東京都　櫻井秀雄先生

★このたびは御丁重な御手紙並びに「成寿」秋季号をお送り下さいましてまことにありがとうございました。二十一世紀は宗教と芸術の時代と思っております。いよいよの御活躍をお祈りいたしつつ、御礼まで。

横浜市　木村尚三郎先生

★慶祝　成寿山善光寺開創二十五周年、並に横浜善光寺留学僧育英会設立十周年

心からお慶び申上げます。

今日に至るまでの御苦心と御法燈の伝爾発展も並々ならぬ御功績ながら、留学僧育英会について設立十周年を迎えられましたことを、衷心より祝賀申上げます。

島根県　雲藤義道老師

★善光寺開創二十五周年、おめでとうございます。とにかく停滞気味の既成佛教界にあって、とりわけ善光寺と留学僧育英会の活気が目立っている感を受けました。益々の御隆盛を祈念申し上げます。

東京都　本間康一郎様

★二十五周年の数々の記念のお品頂戴いたしまして有り難う存じました。お寺様のご繁栄おめでとう御座居ます。お陰様で私共お守り頂いて一同無事、健康に暮させていただきます事、有難い事と存じて居ります。

横浜市　高橋誠一様

★成寿二十三号拝受致しました。有難うございました。永久保存していく心算です。
方丈さまには権大教師様に御栄進遊されました御由承り誠におめでとうございます。心からお慶び申上げます。

横浜市　佐々木時子様

★二十五周年本当におめでとうございます。御祝典も素晴しく、無事行なわれた御様子、心よりお慶び申し上げます。横浜の景色も、皆様のお写真もとてもなつかしく、遠く離れて、新たな心の励みとなりました。

宮城県　佐藤幸恵様

★いつも遠方までお心にかけて頂き何とお礼申し上げて良いやら申し訳ない気持でいっぱいでございます。又本日はすばらしい本と善光寺の心しみる詩と楽譜を御恵送下さいまして、一時、口づさんでみました。ありがたく胸がジーンとして参りました。善光寺の御発展を祈念します。

山梨県　高山さつき

★立春を迎えて皆様ご健勝のことと存じます。
平素から『成寿』を拝読させていただきありがとうございます。
私の編集しております学園紙『りんどう』4月号に先般、先生のご関係で掲げられた伊藤三喜庵先生の作品等を東先生にご紹介いただくべく準備しようと思っています。この節にはご高覧いただきたく存じます。

東京都　草彅　高興

★謹啓　立春の候
開山忌、先住忌の御事、当日まですぐ目の前にまで迫って、大変失礼をしておりますが、出来ますれば、拝登させて頂きたく、大変直前に失礼ですが、お願い致します。
当地では一月十七日の大震災にて交通やら諸々大混乱を

きたしているような現状であります。ボランティア会と曹青でも現在合同で活動を開始しております。混乱ばかりのような事で、何一つきちんとしたことも出来ずにおりましたこと、申し訳なく存じます。

――成田　大航

お便りを募集します

いつも温かいお便りをありがとうございます。成寿では読者のページを心ふれあう豊かなものにしていきたいと考えています。みなさまからの楽しいお便り、ご意見、ご感想をお待ちいたしております。

留学生からのたより

オランダ

早川　敦

ライデンでは皆が冬のコートを着て歩いております。日本でもそろそろ紅葉の季節かと存じますが、理事長先生におかれましてはますます御清栄のことと御推察申し上げます。

十月十四日に口頭試問及び修了証授与式が行われ、無事卒業致しました。一時間近くの口頭試問で、修士論文について突っ込んだ議論を交わしましたが、結局、修論の中で私の理論は全体的には正しいものの、尚若干の修正が必要であるということで合意致しました。

ライデンに参りましてから三年になりますが、微力ながらここまで来られましたのは理事長先生はじめ皆様方の御支援の賜と存じます。深く御礼を申し上げます。

目下のところ、修士論文の第二版にとりかかっておりますが、これはできれば発表できる形にまとめたいと存じます。それがすみますと次は、新しい研究テーマについてすでにボーデヴィッツ教授と議論をはじめておりますので、そちらの方にとりかかりたいと存じます。

一月中旬に一旦帰国致しますのでその際には御挨拶に御伺い致したいと存じます。

まずは右まで。末筆ながら理事長先生の一層の御活躍をお祈り申し上げます。

一九九四年十月十九日

11窟

ご寄付御礼

〈育英会寄付者〉

トーヨコグループ代表 根本　紀一殿	百万円
総和会岩手支部殿	三十万円
嶽山会(長野)殿	十五万円
岡田　哲道殿	十五万円
中村　淳子殿	十四万円
斎藤　邦義殿	十万円
長尾　陽一殿	十万円
北舘良之助殿	十万円
中村　晴夫殿	十万円
須田　勲殿	十万円
福田　千城殿	十万円
渡辺　令一殿	十万円
井高　帰山殿	十万円
宮林　昭彦殿	十万円

越石商店殿	十万円
瀬之間政勝殿	十万円
伊串　昇顯殿	十万円
漆原　義哲殿	十万円
大津　正二殿	十万円
三楽建設殿	十万円
亀野　哲雄殿	五万円
徳恩寺殿	五万円
唐戸あゆみ殿	五万円
山下　玄道殿	五万円
宮田　林産殿	五万円
中村　正信殿	五万円
長尾　陽一殿	五万円
匿　名	四万八千円
瀧澤　武雄殿	四万円
平野　国俊殿	三万円
山口今朝雪殿	三万円
近藤　浩司殿	三万円

篠崎　知足殿	三万円
石川　征一殿	三万円
成田　大航殿	三万円
岩波　道俊殿	三万円
大道　晃仙殿	三万円
従野　公徹殿	三万円
林　秀顯殿	三万円
常林寺殿	三万円
東京江東ロータリークラブ殿	三万円
メモワール殿	三万円
横尾　太寿殿	三万円
今野　庸彦殿	三万円
黒田　トシ殿	三万円
飯塚平八郎殿	二万五千円
堀内　肖吉殿	二万円
越前　竹子殿	二万円
櫻井　和子殿	二万円

福田　豊行殿（大圓寺）　二万円
椎名　宏雄殿　一万円
山下　重樹殿　一万円
梁川　元成殿　一万円
山崎　康弘殿　一万円
國廣　敏郎殿　一万円
飯田　利行殿　一万円
高三　公一殿　一万円
村田　一夫殿　一万円
影山　秀和殿　一万円
伊藤　真愚殿　一万円
早川　勝久殿　一万円
奥村　公規殿　一万円
小沢　正氣殿　一万円
武田　　大殿　一万円
広野　義成殿　一万円
沖田　玉映殿　一万円
河野冨美恵殿　一万円

安田　淳子殿　一万円
辻　　稲男殿　一万円
田代　盛夫殿　一万円
井上　葉智殿　五千円
高山　　徳殿　五千円
波多野収通殿　五千円

〈成寿賛助〉

黒田　トシ殿　三万円
赫多　正円殿　二万円
宮本　延雄殿　二万円
永井　功雲殿　二万円
安藤　嘉則殿　二万円
中村　定典殿　二万円
菅原一二三殿　一万円
西岡　祖秀殿　一万円
中島　久子殿　一万円
萬　福　寺殿　一万円

岩崎健次郎殿　一万円
石川　孝禅殿　一万円
黒田　トシ殿　一万円
市川　千晃殿　五千円

FOREWORD

First of all, I would like to express my deepest sorry and sympathy on the victims of Hanshin Greart Earthquake. I pray the dead's soul rest in peace and give my very best wishes to their revival as soon as they can.

By the way, this spring is the sixteenth anniversary of the Zenkoji-Temple's founder, Rev. Baiannhakujunn, so we held the memorial service inviting Kanninn-Minamisawa-Dohjinn, who is the chief bonze of the head temple Eiheiji on 11th February. And the ceremony was held to grant notification of the 11th Scholarship on the same day. The number of the Scholarship's students reached 61, including 5 members adopted this year, the countries are 17 and 1 area. Now we are promoting to edit the second volume of students' essays to publish around this Autumn.

These fruits are wholly owing to heartful back ups of all concerned and our supporters. I don't

know how to thank you enough and please give us further supports to our Scholarship working.

After the memorial service, Rev. Kannin-Minamisawa gave us an address as follows.

"Teaching of Buddha is beyond nationality and race, which is the unniversally acknowledged truth. Our life depends on studying his teaching, and the joy given by Buddha is more precious than anything else, so I think our duty is to make better world as a Buddhist"

Rev. Secchoh, who was the teacher of Chinese priest Rev. Nyojou(the taeacher of Rev. Dohgen), also preached the sermon as follows.

"Two third of my life has past with nothing to be proud of. I just live irresponsiblly." Then, he reflected on his life and devoted himself to his purify. I hope to have my eyes opened to the teaching of Buddha, awakened myself as his pupil, and do my best to contribute my share to the world peace, Buddhist prosperity, and welfare of mankind with all of you.

編集後記

▼桜の花がほころぶ時節となりました。成寿二十四巻をお送り致します。

一月十七日早朝の阪神大震災は、一瞬にして五千人余りの尊い人命を奪い、都市を破壊する大惨事でした。罹災された皆様には心からお見舞い申し上げますと共に、亡くなられた方がたのご冥福を念じてやみません。

▼善光寺開基家、㈱ナリス化粧品社長・村岡有尚氏が三月五日、逝去されました。善光寺が現在あるも村岡氏はじめ、ナリス化粧品全社あげてのご支援あってのこと。喪心より感謝申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。

▼本号の特集は「大本山永平寺」。平田仁氏のグラビア、池田好雄老師と小倉玄照師には味わい深い玉稿をいただきました。誌上よりお礼申し上げます。

▼本年はご開山楳庵白純大和尚の十七回忌にあたりますので、ご開山の遺徳をしのび、善光寺の光真寺をグラビアと共にご紹介致しました。また『楳庵白純大和尚』誌より大道晃仙老師とグラスマン徹玄師の追悼文を転載させていただきました。ありがとうございました。

▼昨秋、善光寺留学僧育英会の黒田理事長、佐藤常務理事、東理事、松ヶ岡文庫長古田紹欽博士が、韓国通度寺に拝登致しました。通度寺の定岳泰応住持や知庭教務院長ほか一山の破格のご歓待にあづかり、また、三日間を通して通訳を務めて下さった李焌秀和尚と釈梵河先生に心からお礼申し上げます。

▼成寿の表紙絵やカットをお描きいただいている伊藤三喜庵先生が、十二月に東京で個展を開かれました。その記念としてグラビアで先生の作品(善光寺所蔵)をご紹介。誌上展覧会をお楽しみ下さい。

▼次号は「金沢の大乗寺」と、今夏、講演のため黒田理事長、東隆眞先生が訪米するのを機に、「ロサンゼルス禅センター」の特集を組む予定です。また『留学生論文集第二集』を近々発刊の予定です。どうぞご期待下さい。

▼五月二十八日に身がわり不動明王祭がおこなわれます。大勢の皆様のご参詣をお待ち申し上げます。

成寿　第二十四号
平成七年四月一日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野中央一丁目十二番九号
電話　〇四五(八四五)一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

こころ庵

横浜善光寺